時間と空間〈時空〉を超えて

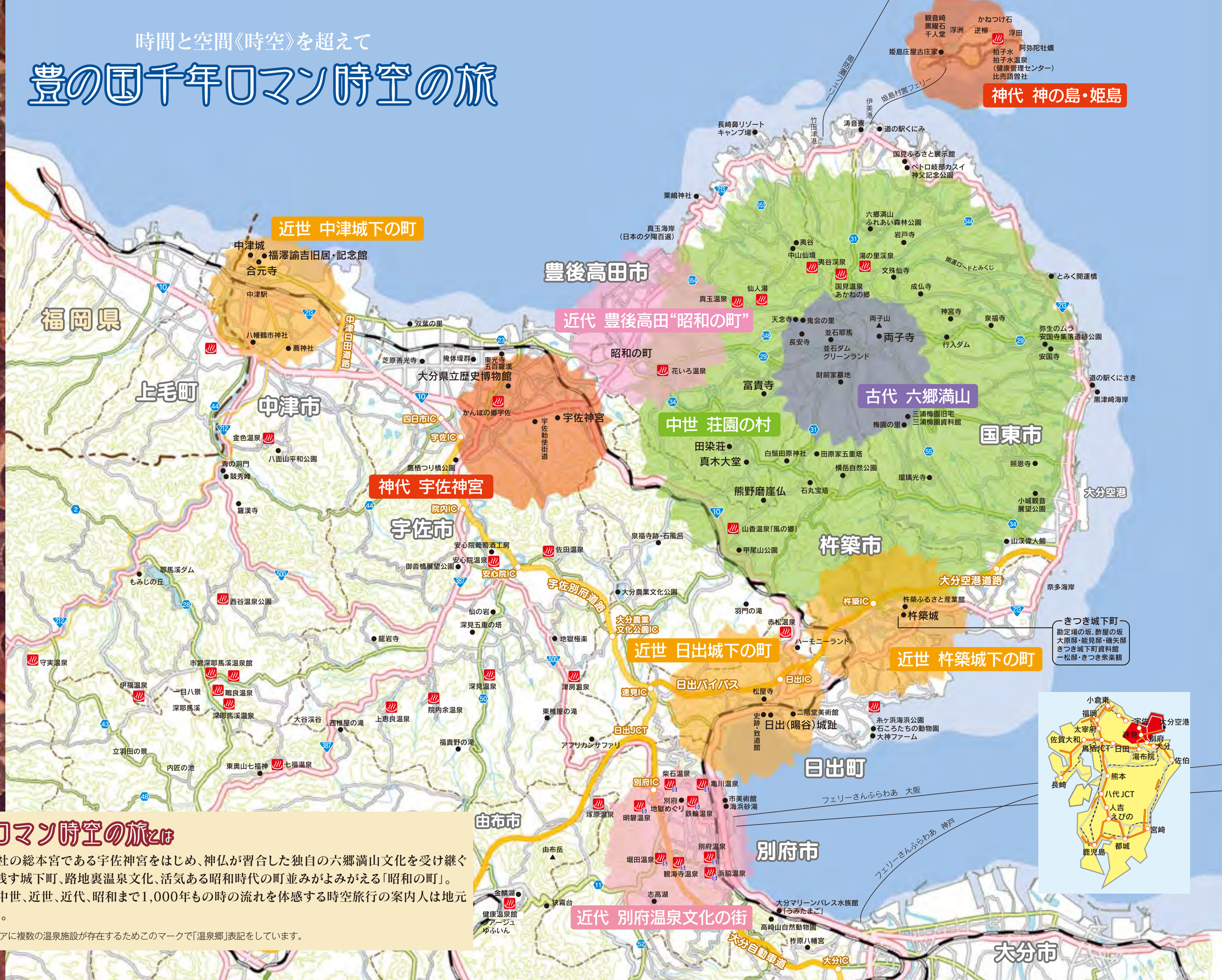
豊の国千年ロマン 時空の旅

大分県北部地域観光ガイドマニュアル

千年の時の流れの旅へご招待——

時間と空間《時空》を超えて

豊の国千年ロマン時空の旅



豊の国千年ロマン時空の旅とは

全国4万を超える八幡社の総本宮である宇佐神宮をはじめ、神仏が習合した独自の六郷満山文化を受け継ぐ神社仏閣、江戸の趣を残す城下町、路地裏温泉文化、活気ある昭和時代の町並みがよみがえる「昭和の町」。これら神代から、古代、中世、近世、近代、昭和まで1,000年もの時の流れを体感する時空旅行の案内人は地元ボランティアガイドです。

温泉郷：別府には狭いエリアに複数の温泉施設が存在するためこのマークで「温泉郷」表記をしています。

時間軸と空間軸でみる

神代	飛鳥時代		**姫島誕生（国生み神話）**
		紀元前660年ごろ	**神武天皇が東征の折、宇佐の地で菟狭津彦と菟狭津媛によってもてなしを受ける**
		239	邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送る
		391	大和朝廷が国内を統一
		538	仏教伝来
		571	**八幡神が宇佐の地に現れる（伝承）**
古代		645	大化の改新
		710	平城京遷都　**最初の八幡社鷹居社造営**
		718	**仁聞菩薩、六郷山の寺を開く（伝承）**
		720	**宇佐神宮放生会始まる**
			日本書紀編纂
		724	聖武天皇が即位
		725	**宇佐神宮造営。八幡大神一之御殿　現在地に遷座**
		733	**宇佐神宮、二之御殿建立。比売大神鎮座**
		737	**八幡神が初めて『続日本書紀』に登場** **新羅との関係緊張、天然痘が蔓延** **弥勒寺建立の託宣が下る**
	奈良時代	738	**宇佐神宮境内に弥勒寺造営**
		741	国分寺・国分尼寺の建設はじまる **宇佐弥勒寺に最勝王経と法華経を安置し、三重塔を造る（国分寺と同等の扱い）**
		743	**大仏建立の詔**
			墾田永年私財法が発令
		747	**八幡神、託宣により大仏建立を助成**
		749	**宇佐八幡神、大仏拝顔のために紫の輿で東大寺に入る**
		752	東大寺の大仏完成　天平文化栄える
		756	**聖武天皇の病気全快を宇佐神宮に祈願する**
		769	**宇佐八幡宮神託事件（道鏡事件）**
		781	**八幡大神、大菩薩を称す**
	平安時代	794	平安京遷都
		805	最澄が天台宗を伝え、延暦寺を建てる
		806	**最澄が渡唐の折、宇佐神宮に安全祈願に立ち寄る** **帰国して塔を奉納**
		823	**宇佐神宮、三之御殿建立。神功皇后を祀る**
		855	**能行聖人、仁聞菩薩の修行の旧跡をたどり宇佐・国東の峯々を巡行する（峯入行の始まり）**
		1016	藤原道長が摂政となる
		1023	**宇佐弥勒寺講師元命、石清水八幡宮別当に就任**
		1053	**九州各国の負担で、焼失した弥勒寺講堂を造営**
			この頃、宇佐神宮の荘園が最大規模となる
		1105	**弥勒寺、本家職を石清水八幡宮に寄進する**
		1120	**六郷山、本家職を比叡山に寄進する**
		1150	**このころ、富貴寺建立**
中世	鎌倉時代	1185	**鎌倉幕府成立**
			源頼朝、八幡神（大菩薩）を氏神として保護
		1274～1281	**宇佐神宮を中心に、敵国元の降伏の祈祷を行う**
		1338	足利尊氏が征夷大将軍となり、室町幕府を開く
	室町時代	1400～1450	**大内氏による宇佐神宮復興**
		1549	フランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝える

神代

宇佐市にある神仏習合発祥の地、宇佐神宮。宇佐神宮は神社でありながら九州一の荘園領主であり、わが国初の神宮寺「弥勒寺」を擁する神仏一体の聖都でした。

古代

国東半島の六つの郷では天台宗と結びつき、山間に多くの寺院を建て、「六郷満山文化」という独特の仏教文化を花開かせました。今でも国東半島には山岳仏教の文化が色濃く残り、人々の信仰を集めています。

中世

国東半島にある田染荘は宇佐神宮の荘園でした。今でも約 1,000 年前の景観がそのままの姿で残っています。

中世	室町時代	1551	**フランシスコ・ザビエルが日出に立ち寄り、日出の港から大友宗麟の府内藩へ渡る**
		1560	桶狭間の戦い
		1561	**大友宗麟　宇佐神宮焼打ち**
		1573	室町幕府滅亡
		1582	本能寺の変
	安土桃山時代	1587	**黒田官兵衛孝高が豊前六郡12万石の領主として入国**
		1590	秀吉が全国統一
近世		1600	**石垣原の戦い**
			関ヶ原の戦い
			細川忠興が三十九万石で中津城に入城
		1601	**木下延俊が三万石で日出城に入城**
		1603	徳川家康が征夷大将軍となる
	江戸時代	1632	**小笠原長次が八万石で中津城に入城**
		1645	**松平英親が三万二千石で杵築城に入城**
		1717	**奥平昌成が十万石で中津城に入城**
		1764	**中津奥平家に池大雅が来訪**
		1774	**前野良沢ら『解体新書』編纂**
		1835	**福澤諭吉が大坂中津藩蔵屋敷で誕生**
		1858	**日出藩が藩校致道館を創立**
		1860	桜田門外の変
		1864	**馬関戦争**
		1868	明治維新
近代	明治時代	1870	**神仏分離となり、坊中は宇佐宮から離れる** **松方正義が別府波止場神社を建立**
		1871	**別府楠港整備**
			廃藩置県
		1872	**福澤諭吉が『学問のすゝめ』を著す**
		1879	**竹瓦温泉建設**
		1889	大日本帝国憲法公布
		1904	日露戦争始まる
	大正時代	1911	**日豊本線別府駅・亀川駅・東別府駅が開業する**
		1914	第一次世界大戦勃発
		1915	**日出で的山荘を建築**
	昭和時代	1920	**竹瓦小路完成**
			高度経済成長期
		1928	**別府にて日本初のバスガイド誕生** **地獄巡り始まる**
		1933	**宇佐神宮、昭和の大造営始まる**
		1934	**現在の国東市、豊後高田市、姫島村が、瀬戸内海国立公園に指定される**
		1939	第二次世界大戦始まる
		1948	温泉法制定
		1959	**姫島の塩田廃止**
		1964	東京オリンピック開催
		1965	**豊後高田市～宇佐神宮宇佐参宮線の全線廃止**
		1960年代	**べっぷ駅市場が誕生**
	平成時代	1990	バブル崩壊
		2001	**豊後高田市・昭和の町まちおこし始まる**
		2010	**田染荘小崎　国の重要文化的景観に**
		2011	**瀧廉太郎の墓を日出・龍泉寺の滝家墓所に移す**

※年表内の**太字**は豊の国千年ロマン観光圏に関連する出来事です。

近世

中津市、杵築市、日出町では江戸時代の時の流れを感じる、城下町三都巡りが楽しめます。

近代

近代の街の景観を残す別府では、各地で共同湯の文化に触れることができます。また路地裏にも湯の街別府の古き良き時代の名残りを残しています。

豊後高田には昭和 30 年代のままの形、心を残した「昭和の町」があります。時は物の形も人の心もすっかり変えてしまいましたが、ここには変わらなくてよかった形や心が今なお残されています。

【神代】姫　島

ストーリー

姫島は、『古事記』によると、伊邪那岐命、伊邪那美命が、国生みに際し、大島を生み、次に女島を生むとあります。この女島が姫島で、またの名を「天一根」と言います。古歌にも「姫島のあたりにならぶ島もなし、うべもいひけり天の一根」とうたわれています。

『日本書紀』によると、垂仁天皇の時代、意富加羅国（今の韓国南部）の王子：都怒我阿羅斯等が白い石から生まれた童女と結婚しようとしましたが、童女はそれを逃れて、比売語曽の神になったと記されています。これが、姫島の名前の由来です。

姫島の財産である黒曜石を南北に交易する出発点であり、大陸から中央にもたらされた文化の中継点であり、江戸末期の馬関戦争では密談の場となり戦いの分岐点でもありました。

瀬戸内海に位置した姫島は、その時代時代の“海路の要所”の役割を果たしていたのです。

スポット紹介

1 比売語曽社

両瀬に鎮座し、祭神は比売語曽神です。ご神体は白い石といわれ、本殿裏手には「元宮さま」とよばれている石祠が、岩の裂け目にお祀りされています。この「岩の裂け目」と「石祠」は真東を向いており、その神秘的な取り合わせはパワースポットとしても注目されています。

祭神の比売語曽神は日本書紀の記載によると、韓国南部から渡来した神様でその事績から、頑張る女性を応援する神様として人気があります。また、女性だけのおみくじの本もあり、話題をよんでいます。

2 拍子水

お姫様が身だしなみをするために、お歯黒をつけようとしましたが、お歯黒を染める水がなく困っていました。そこで館近くの山麓に向かって、手拍子を打って祈ったところ、岩の間から水が湧き出したことから拍子水といいます。

神代の昔から絶え間なく毎分500～600ミリリットル湧き出ているのです。この拍子水を活用したのが拍子水温泉で、24.9℃の源泉とそれに湯を加えた湯に入ることができます。泉質は炭酸水素塩冷鉱泉で、慢性皮膚病・慢性消化器病・神経痛等に効果があり、村内外の多くの人に利用されています。柳田国男は『日本の伝説』で鉄奬水と書いています。

3 逆柳

お姫様が新羅の姥からもらった柳の楊枝で歯磨きをした後、その楊枝を鉄奬池のほとりの土中に逆さまに刺したところ、芽を出し、枝の葉が逆さに出たので逆柳といいます。柳の木は蛇柳で、現在７代目にあたります。枝垂れた柳は良く見ますが、この柳は枝垂れていないのが特徴です。

4 かねつけ石

別名をおはぐろ石ともいいます。お姫様が館の庭先の海の見える大きな石の上に腰かけて、山麓から湧き出た水でお歯黒をつくり歯を染めました。その時に使った猪口と筆を置いた跡が残ったと言われています。この石は大石で地下深く埋もれており、今は上部の平らな部分があらわれています。

5 浮田

大昔、ここ稲積の池に夫婦の大蛇が棲んでいたそうです。しかし田を作るために池を埋めた時、村人が誤って、女の大蛇を埋めてしまった。この上を踏むと女の大蛇が動きだして田が浮くように揺れ動くというのです。男の大蛇は僧侶に化けて、漁師に山口県の平群島まで船で送ってもらい、船賃の代わりに鯛を取る方法を教え、そのまま島の池に住み着いたとの事です。

6 阿弥陀牡蠣

海の洞窟の石柱の内側に、満潮時でも海面から１メートル上に無数の牡蠣が付着しています。その群生の形が阿弥陀三尊に似ていることから、この名前がつきました。この牡蠣はうるう年の大晦日子の刻に移動すると言われています。この牡蠣は海水につかることがなく、食べると腹痛を起こすといわれています。

7 千人堂

観音崎の先端に馬頭観音を祀った小さなお堂があります。陰暦の大晦日の夜、債鬼に追われた人々を観音様の御慈悲でこの御堂に逃れると、千人もかくまうことができるということで、この名が付けられました。

平成18年「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選定されました。

8 浮洲

沖合の海上に浮いているように見える細長い洲があります。この辺りには大きな岩があり、その上に漁業の神様：高倍社が鎮座され、その前には鳥居がたてられています。高倍社と鳥居ははどんな高潮や大しけの時でも漁民を潮から守るため、洲は浮かび上がり、決して潮に浸かる事がないと言います。潮が引くと陸とつながります。

トピック

合併していない村

神代の時代から大分県で唯一市町村合併していない村です。平成の大合併も参加はしませんでした。村では節約するところは節約し、無駄な公共事業をせず、住民の命やくらしに関わるところに出資する理念を持っているのです。

大帯八幡社

村民尊崇の産土の神です。八幡大神（応神天皇）の母：大帯姫（神功皇后）から名付けられと言われています。本殿は宇佐神宮と同じ八幡造りです。江戸時代には杵築藩主松平家累代安産の祈願所として信仰を集めました。

神社には２台の舟型山車があり、１台は慶応年間杵築藩の御座船を建造した木野村亀太郎翁が奉納したもので、また、もう１台は平成２年、その子孫が奉納した御神舟八幡丸で、秋の大祭に村内を引き巡ります。

また境内には稲荷社があり、油あげをお供えすると失せ物が見つかると言われ、見つかるとお礼の油あげをお供えに来る人も多いそうです。

※八幡造りとは、切妻造り・平入りの建物が前後に二棟並ぶ形、横から見るとM型の造りです。

キツネ踊り

おしろいした顔に紅粉でひげを書き豆絞りで頬被りした子ギツネたちが“オラサオラサ ソライタソライタヨイヨイ”と声を出しながら跳ねるように踊るきつね踊りは、大地を踏みつけ害虫や悪魔を追い払う鎌倉時代の念仏踊りから発展したものと言われています。

他にもアヤ踊り、猿丸太夫、銭太鼓等の踊りがあり、まず地元の盆坪で踊り、島内各地の盆坪を巡って踊ります。これらの踊りは平成24年（2012）国の記録等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されました。お盆以外にも、キツネ踊り・アヤ踊りは姫島かれい祭り（毎年５月）や姫島車えび祭り（毎年10月）等のイベントで披露されています。

姫島庄屋 古庄家

大友能直の宰臣：古庄四郎重吉を祖とした古庄家は、現金収入を得るために塩田開発・さつまいもの栽培等を行いました。第11代小右衛門が天保13年より3年の歳月をかけて、現在の屋敷を完成させました。敷地は約550坪一部二階建ての寄棟造りで延建坪は129坪です。庭園、お成りの間等、旧庄屋の格式を伝える貴重な建物です。明治37年から昭和13年まで郵便局も設置されていました。ここは馬関戦争の際に伊藤博文・井上馨らが密会に使ったと言われています。

信号の話

島で唯一の信号が島の中心に設置されています。交通量が多いからではなく、子どもたちが島外に出て交通ルールを守るという教育上の理由で設置されました。

デポジット制度

昭和59年、空き缶の投げ捨て防止のために始められました。缶飲料にデポジット識別シールを貼って“預かり金＝10円”を上乗せして販売し、飲んだ後に お店に持っていけば10円を返金するというシステムです。回収率は90パーセントで、美しい環境づくりが進められています。

車えびの養殖

昭和34年に沿岸漁業と並ぶ村の基幹産業であった塩田が国の方針で廃止になったため、その塩田跡地を利用して、車えび養殖に取り組むことになりました。大分県の一村一品運動の代表的な特産品として、全国にその名を知られています。

黒曜石二大産地の１つ

黒曜石は約34万年前の氷河時代、火山噴火が繰り返される中、火山から噴出されたマグマが地表で急激に固まったものです。

石器時代には矢じりなどの石器石材として利用され、特に縄文時代、黒曜石は全国的に拡大しました。東九州では石器石材の中核を占め、交易の範囲は広く、南は鹿児島県種子島から北は大阪府までの広い範囲に運ばれました。周防灘の水平線に沈む夕陽が黒曜石を黄金色に照らす光景は神秘的です。観音崎一帯は平成19年に黒曜石産地として国の天然記念物に指定されています。

そして、この貴重な遺産が改めて見直され、「日本のジオパーク」（地質資源）登録に向けての活動も始まっています。

アサギマダラ

春には、南西諸島から本州へと北上します。夏にはその子孫が、標高2000メートル級の涼しい高地に滞在し、秋には、九州・沖縄や台湾を目指して南下をする、海を越えて飛ぶ日本唯一の渡り蝶です。姫島では５月からスナビキソウをもとめて10月からフジバカマをもとめて飛来します。多い時は2000頭以上が飛来する日もあります。

【神代】宇佐

ストーリー

八幡神は、６世紀代の欽明天皇と敏達天皇のとき、大神比義と辛島乙目の前にはじめて出現したと『八幡宇佐宮御託宣集』（以下『託宣集』）に書かれています。この出現から150年ほどを経た８世紀初頭の和銅年間に、６世紀半ばに登場した大神比義と辛島乙目は宇佐の鷹居の地に宮柱を建て八幡神を祀り、はじめての社が造られました。６世紀の出現は伝説の世界で、ここからが実態に近い世界がはじまります。この社殿の建設は律令国家による九州南部の隼人勢力の平定と関係しています。713年に日向国を割いて大隅国が成立し、その翌年、豊前国から隼人を教導するためと称して渡来人（200戸、一郡規模）の入植が行われました。この渡来人の拠点が『託宣集』では辛国城と呼ばれ、ここにも軍神の幡の神として八幡神が出現しました。720年の大隅隼人の大乱が起こりますが、この乱の原因は、入植による者と隼人との対立にあったと考えられます。八幡神宮寺弥勒寺の初代別当となる法蓮は、この乱で殺された隼人の霊が豊前海の蜷に宿り病気が蔓延する恐れが出たので、放生会を始めたといわれています。正史である『続日本紀』では、乱の翌年の721年、法蓮は医術の賞としてその一族に宇佐の君の姓を与えられたと記しています。この医療は、生き物を放して殺生の罪から生じる病などの災いを防ぐ「放生」という方法を指していると考えられます。

725年には、八幡神の社殿は、小山田の地を経て小倉山に社殿が造られました。この地が現在の上宮の社殿の地で、周辺は古代以来ともいわれるイチイガシの森（国指定天然記念物）に覆われ悠久の神地としての雰囲気を残し続けています。

737年、隣国新羅との軍事的危機と新羅からもたらされた天然痘への脅威が重なり、国内が混乱する中、宇佐では、日足の弥勒禅院を現社地に移すことが託宣され、翌年738年に弥勒寺が八幡境内に建立されました。この弥勒寺の建立は、軍神と放生の力をもつ仏教の結合であり、国分寺建立の理念、鎮護国家の思想と同じものでした。

聖武天皇は、749年12月、この仏教と神の結合を完成させるために、八幡神を入京させます。八幡神をその身に降ろしたシャーマン大神杜女を紫色の輿に乗せ、出家させた姿で東大寺に入ります。「八幡神は、自ら日本国中のすべての神々を率いて大仏建立に協力した」と託宣しおり、八幡神は日本の神々と仏を結合させる、神仏習合を推進する神のリーダーとなりました。

聖武天皇は、当初、行基の指導の下、民衆の手で、紫香楽宮の地に大仏建設を進めていましたが、光明皇后などの反対勢力に阻止されました。しかし、光明皇后は自らが積極的に進めた東大寺大仏建立計画を自分のものにするために、宇佐神宮の力を利用したのです。

749年の入京で神々の頂点に立つことになった八幡神ですが、まもなく、聖武天皇の力が後退し、光明皇后と藤原仲麻呂らのグループの力が台頭したことによって、入京にかかわった神官らは流刑となり、神に与えられた封戸と呼ばれる財産も失いました。しかし、聖武帝の仏教の理想を受け継いだ娘の孝謙上皇は、父の理想とあまりにもかけ離れた藤原仲麻呂（恵美押勝）政権と対立し、クーデタを起こし、再度天皇の地位に就きました。これが称徳女帝です。女帝は出家したまま天皇に即位し、「出家した天皇には出家した大臣がふさわしい」として道鏡を大臣の地位に就け、やがて法王としました。出家した天皇の下の政治は、まさに聖俗一体、神仏習合の政治形態となりました。

769年、大宰府からもたらされた「道鏡を天皇の地位に就けよ」という宇佐宮の託宣をめぐって、神託の真偽を確かめるため、和気清麻呂が派遣されましたが、「天皇は必ず天皇家のものが就くように」という託宣を持ち帰り、天皇や道鏡を怒らせ、大隅国に流罪となりました。これを「宇佐八幡道鏡託宣事件」といいます。しかし、称徳天皇の突然の死去で道鏡は下野薬師寺に左遷され女帝の夢は潰えます。

その後、八幡神は777年に神自身が出家し、781年には、大菩薩を称するようになります。このころの八幡大菩薩は、聖武太上天皇の霊とみなされていますが、やがて、823年には、神功皇后の霊を祀る第三殿が造られると、八幡大菩薩は神功皇后が生んだ応神天皇の霊とみなされるようになります。さらに、応神の皇子・皇女の若宮が祀られ、八幡大菩薩の家族が形成されます。

860年には、行教によって宇佐から八幡が、山城の国（京都府）と摂津の国（大阪府）の境の男山に勧請され、「宮寺」という形式で完全に神仏が習合した王城鎮護の拠点、石清水八幡宮が成立します。ここから、その若宮として勧請されたのが鎌倉の鶴岡八幡宮です。八幡大菩薩は、国家神、武家の氏神として全国で祀られ、宇佐八幡宮、全国４万社ともいわれる八幡社の総本社となります。

宇佐八幡宮は、平安時代の後半、九州の三分の一の土地を支配したといわれています。実際は、宇佐八幡宮領は宮方と寺方（弥勒寺方）に分かれ、宮方は摂関家を頂点とし、寺方は石清水八幡宮の別当家の支配に入ることになりました。膝下の国東半島では田染荘（宇佐宮領）、都甲荘（弥勒寺領）など、そのほとんどが宇佐八幡宮領となりました。その遺産として残っているのが、富貴寺阿弥陀堂、真木大堂などです。

平安時代末、宮方の代表宇佐大宮司は絶大な力をもち、娘たちを都の貴族と結婚させ、平家とも結びつき

ました。しかし、平家が滅びると、窮地に立たされましたが、源氏の氏神が八幡大菩薩であるところから、幕府は大宮司を苦々しく思いながらも八幡宮領は保護することになりました。しかし、武家が勢力をもつ鎌倉時代では、所領の押領が続き、八幡宮領も危機に瀕しました。

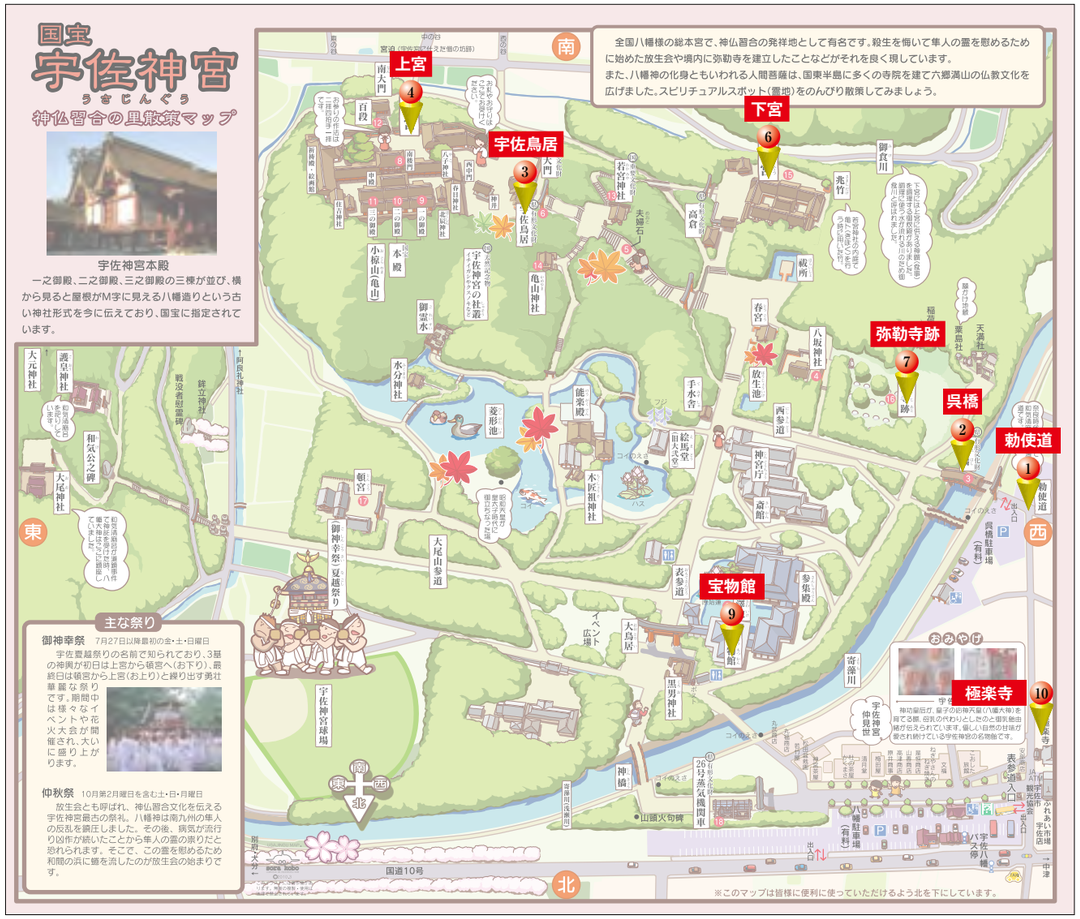
文永・弘安の役（1274年～1281年）でモンゴル軍が日本を襲うと、軍神としての八幡神の力に再び期待が寄せられ、盛んに異国調伏の祈祷が行われました。八幡神は、その神威で暴風雨を起こし、敵の軍船を沈め、国を救った神という名声を不動のものにしました。これによって、武家などの押領で失われた八幡宮領を再興するため、「神領興行法」という法令が出され、土地の返還訴訟が盛んに行われるようになりました。田染荘でもこの訴訟関係の文書が大量に残されています。

幕府は、宇佐八幡宮を基本的に保護する政策を取ってきましたが、幕府が滅びると、九州全域に賦課を行い実施してきた遷宮や行幸会、放生会という大規模な祭礼を行うことは困難となります。南北朝時代の戦乱を経て、室町時代、筑前・豊前の支配を行うことになった大内氏が、九州の支配者の地位を目指す意図もあって、衰退した宇佐宮の儀式と建物の再興を企画します。これが俗に「応永の再興」と呼ばれるもので、今日でもその再興のときに造られた仁王像など多くの仏像類、絵図等が宇佐宮や周辺の寺院に残っています。

大内氏の下で、宇佐宮は一応保護されますが、往時の力はなく衰退の一途を辿ります。16世紀半ば、大内氏が滅びると、豊前に大友氏が入りますが、大友宗麟はキリシタン大名となったため、さらに宇佐神宮は窮地に陥ります。

江戸時代は、当初、豊前に入国した細川氏が、宇佐神宮再興をめざしますが、その後は、ほとんどの所領は失い、島原藩領の中に、僅かに1000石（南宇佐村）を与えられ、辛うじて、近隣の庄屋などの出資に依存しながら神事を行ってきました。宇佐宮が再び脚光を浴びたのは、徳川吉宗期に始まる勅使の再興です。鎌倉時代末に途絶した宇佐宮への勅使は、江戸時代に3回派遣され、皮肉にも、勅使は廃仏的命令を出し、神仏習合を進めた八幡神への使者が神仏分離を推進するということになったのです。

スポット紹介



1 勅使道

宇佐神宮には天皇即位や国家異変などに際し、勅使が派遣されました。勅使が呉橋へと続く道を参向したので、勅使街道と呼ばれていました。古代の宇佐大路を踏襲する道路で、中津市の沖代平野の条里跡南限線を通り、薦神社の前、大根川社、四日市・瀬社を経て西参道に続く道です。

2 呉橋

ゆるやかにカーブした桧皮葺の屋根が特徴で寄藻川にかかる橋です。呉は榑とも書き、中国の呉の国の人たちがかけたと言われますが、棺の型をした橋から生まれた名称という説が有力です。木造屋根付き橋としては、広島：厳島神社の回廊に次いで日本で二番目に古い橋です。県の有形文化財に指定されています。

昭和16年（1941）に改築され、橋脚は御影石になりました。普段は両側の扉は閉められていますが、10年に1度の勅使祭や特別な祭礼の時に開放されます。

3 宇佐鳥居

宇佐神宮の鳥居は、朱色鮮やかで両側が反り上がり、黒い丸い台輪と呼ばれるものがあります。また○○神宮などの扁額も無いのが特徴です。それと比べると、伊勢神宮の鳥居はまっすぐな石造りでシンプルなものです。

4 上宮

国宝の本殿は、桧皮葺で切妻の建物が前後に結合した特殊建築で、これを八幡造りと言います。一之御殿には応神天皇の霊：八幡大神、二之御殿には地主神：比売大神、三之御殿には八幡大神の母：神功皇后をお祀りしています。礼殿は幕末の建物です。

5 御許山（マップ範囲外のため位置表記していません）

八幡神が鎮座されたと言われ、山頂には石体の磐座があります。江戸時代までは、弥勒寺に属する御許山坊がありました。現在神域となっている御許山を、上宮の向かいの「大元神社遙拝所」から仰ぎ見る事が出来ます。

6 下宮

こちらは伊勢の内宮と外宮の関係に似ています。神の食事を取り扱う御炊殿が置かれた場所で、御神体の薦の枕もここで調整されました。

7 弥勒寺跡

弥勒寺は宇佐八幡宮の神宮寺です。三重の塔、西塔、東塔、金堂、講堂があったとされ、奈良の薬師寺と同じ造りの堂々たる大きなお寺でした。しかし、江戸時代後期から始まる廃仏毀釈の動きが起こり、明治元年（1968）の神仏分離令により弥勒寺は壊されてしまいます。幸いにも金堂の薬師如来は大善寺へ、講堂の弥勒菩薩は極楽寺に安置されています。

現在も この弥勒寺が残っているならば、国宝級の西日本一のお寺であったに違いありません。今は夢の跡、礎石がその面影を残すのみです。

8 大善寺（マップ範囲外のため位置表記していません）

薬師如来坐像は、弥勒寺金堂に安置されていましたが、明治元年（1968）の神仏分離令による廃仏毀釈運動で、放置されるところを、こちらの曹洞宗：大善寺に移管されました。

鎌倉時代の作で、“大仏”としては一番小さい高さ280センチの寄木造りで、国指定重要文化財となっています。左手には心と体の万病を治す薬の壷：薬壺を持っていて、どんな病も治してくれる仏様です。両脇に治療の手伝いをする看護士の役目を果たす：日光菩薩、月光菩薩を従えて、薬師三尊像と呼びます。また両端には愛染明王、不動明王が安置されています。

9 宝物館

本殿と並ぶ国宝に指定されている孔雀文磬という読経の時に鳴らす鐘が納められています。また、刀剣・神輿襖絵・仁王像など国指定文化財、県指定文化財等、数百点の文化財が展示公開されています。

10 極楽寺

宇佐神宮大弐堂の「阿弥陀如来立像」と、弥勒寺講堂の本尊であった県の有形文化財に指定されている「弥勒菩薩坐像」を安置しています。

また、このお寺には、「幕末三舟」の勝海舟・山岡鉄舟・高橋泥舟や山県有朋・フェノロサの歌碑もあり、歴史に興味のある方ならば、大変興味深い資料があります。そして、明治天皇もご覧になった、八万四千人の髪の毛で刺繍した「髪繍浄土曼荼羅」等も所蔵しています。

トピック

足一騰宮

神武天皇が宇佐に立ち寄られた時、食事を饗される場所として、菟狭津彦と菟狭津媛が造らせた宮ですが、場所が特定できていません。『日本書紀』では宇佐川（現：寄藻川）上流と書かれてあり、宇佐神宮弥勒寺近くが有力ですが、宇佐市上拝田、宇佐市安心院妻垣神社と３つの説があります。

川部・高森古墳群

宇佐市を南から北に流れる駅館川右岸の台地の「宇佐風土記の丘」にあります。6基の前方後円墳を中心として、周辺に約120基の円墳や周溝墓が集積した古墳群で、国の史跡に指定されています。その中には３世紀末～６世紀半の前方後円墳が６基あります。最古の古墳は赤塚古墳で、３世紀末に遡ります。この古墳からは、かつて畿内の古墳と同笵関係を持つ三角縁神獣鏡４面と三角縁盤龍鏡１面が出土しています。免ケ平古墳は４世紀初頭に作られたもので、頂上に竪穴式石室の主体部と箱式石棺が並んでいて、数多くの副葬品が出土しています。片方は男の人で、もう片方は女の人と言う事がわかっています。

薦神社

中津市にある宇佐神宮と密接な関係にある神社です。太古からの自然崇拝が行われていた地域にあって、九重連山・日本アルプスの植物も生息するほど冷たく澄んだ薦神社の三角池は、鏡池とも呼ばれ、池そのものが御神体です。八面山からの湧水を堤で堰き止めた池で、堤防の下を宇佐大路（古代宮道）が通過しています。宇佐氏の始祖「池守」はこの池の池守と言われ、宇佐氏と関係の深い池です。この池の真薦（長さ２ｍの植物）で作られた薦枕は、八幡神の御験として神輿に乗せられ、八つの神社を巡って宇佐神宮に奉納されます。これが6年に一度行われてきた宇佐神宮の行幸会です。

放生会（仲秋祭）

収穫祭・感謝祭の意味も含めて春または秋に全国の寺院や、全国の八幡宮で催される仏教の流れを汲む祭りです。宇佐神宮の放生会は720年の隼人の乱がきっかけで行われるようになりました。大和朝廷が九州の南に住んでいた隼人を平定しようとした時に、宇佐の八幡神が戦いの神として祀りあげられました。隼人を殺した事で祟りがあり、海辺の蜷（巻貝）に悪気が発生して病気が蔓延すると考え、隼人の霊を鎮めるために“殺生→祟り→放生→つぐない”と言う構図が出来上がりました。これによって、宇佐神宮の放生会が始まったと言われています。昔は陰暦8月15日ですが、現在は体育の日を最終日とする３日間に催されます。祭礼の中心舞台は浮殿のある和間神社です。放生会で放されるのは魚や鳥獣が一般的ですが、宇佐神宮の放生会では蜷が放されます。

円通寺

開山は、栄西の孫弟子に当る神子栄尊です。開基は大宮司宇佐公仲です。筑後国に生まれた栄尊は23歳で７日の行の後、「東へ行って学ぶように」とのお告げを受け、上野国で禅法を学び、41歳で中国に渡りました。その途中、宇佐宮に参詣し、八幡神から「神師」の号を贈られましたが、それを憚り「神子」と改め名乗りました。栄尊は弥勒寺再興の勧進聖でもありました。

円通寺の参道は宇佐宮の表参道の延長上にあり、宇佐宮と密接な関係にあることが推測されます。建武年間には、法燈国師を勧請し、一時期、豊前の法燈派の拠点となります。実は羅漢寺とも密接な関係にあることが最近明らかにされました。

大楽寺

宇佐神宮の宮司であった到津家代々の菩提寺で、九州霊場巡りの二十二番霊場、また九州西国霊場第四番として有名な高野山真言宗のお寺です。

平安後期作の「弥勒仏三尊像」と「四天王像」（国重要文化財）、室町時代の絹本着色仏涅槃図が所蔵されています。厄除け祈願の寺として親しまれ、あの放浪俳人：種田山頭火も立ち寄った寺です。

大分県立歴史博物館

1981年、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館として、広大な史跡公園「宇佐風土記の丘」内に建設されました。熊野磨崖仏、臼杵石仏の復刻模型など、宇佐・国東を中心とする大分県の歴史と文化を体系的見る事ができます。また、絢爛豪華さを見事に復元した富貴寺大堂は必見です。博物館見学後、いろいろな史跡を巡れば、より深い歴史と出会えることでしょう。

宇佐神宮・拝観の仕方

宇佐神宮は「二拝四拍手一拝」です。二回おじきをして四回拍手を打ち、最後にもう一回おじぎしましょう。出雲大社と宇佐神宮以外は、御正宮・摂社・末社とも全国共通の「二拝二拍手一拝」です。

【古代】国東半島

ストーリー

「国東」は、平安時代までは、「国埼」「国前」と表記されています。『豊後国風土記』では、景行天皇が周防の佐婆津（防府市）から九州に向かうとき、先に見える半島を見て「あれは国の先か」と尋ねたところから、「国埼」と呼ばれるようになったと書かれています。当時、この地はヤマト国家が支配する最果ての国境地帯でした。

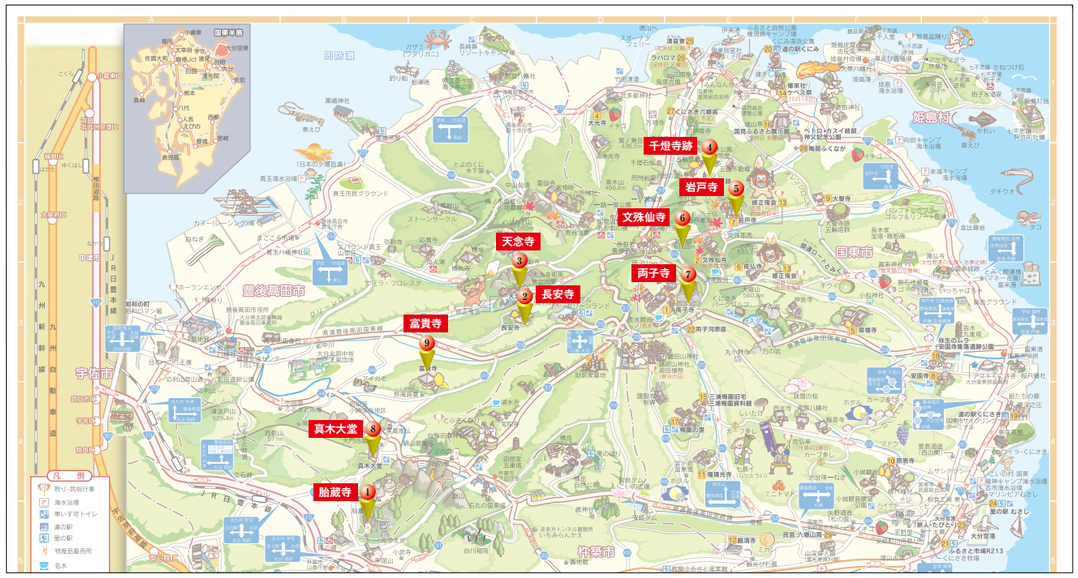
古代、国東半島には、国埼郡が置かれ、中央にそびえる両子山から放射状に伸びる谷筋に沿って、安岐、武蔵、国埼、伊美、来縄、田染の６つの郷が開かれ、六郷と呼ばれていました。この六郷の山々を六郷御山、六郷山と呼び、古代から宇佐八幡宮の弥勒寺の僧たちの修行の場となってきました。

八幡神の化身といわれる仁聞菩薩は国東半島の天台宗の寺院を養老２年（718）に開いたといわれています。しかし、現実には、このころ寺院が存在したとは考えられません。弥勒寺の僧侶は、国埼の山々に入り、岩屋などに寝泊まりしながら、行を積みました。その姿は、今日の峰入り行のルーツです。峰入りは９世紀半ば、宇佐出身の能行聖人が、津波戸山の岩屋で仁聞菩薩から国東の修行の道を教えられたことに始まるといわれています。

10世紀には、宇佐に近い地域から山岳に寺院が形成され、11世紀には、岩屋は住僧の住む寺院となり始めます。12世紀初めには、弥勒寺の傘下にあった国東の寺院は弥勒寺から自立して、寺院集団を形成し、自ら天台宗の延暦寺に寄進することになります。この寺院集団の名称が「六郷山」です。12世紀後半には、本山・中山・末山の三山体制が完成しました。

六郷山寺院は、奥ノ院に六所権現として八幡大菩薩を除く宇佐宮の神々を祀りました。八幡大菩薩が祀られないのは、仁聞菩薩として常に国東六郷の山々で修行を続ける存在であったからと推測されます。奥ノ院の下には、講堂が造られ、その下には、住僧の院や坊という僧の住居が造られました。坊はやがて僧以外の住民も取り込み、鎌倉時代後半から南北朝時代には、坊集落というムラを形成していきます。この時期には、80数箇所の大小の寺院が存在しました。

鎌倉幕府は六郷山を関東祈祷所（幕府の祈祷所）に指定しており、文永・弘安のモンゴル軍の襲来では、六郷山は宇佐八幡宮とともに異国調伏の拠点となります。襲来の後も祈祷は継続され、今日の修正鬼会の形成に関係したといわれます。修正鬼会の鬼は蒙古の鬼ともいわれ、岩戸寺では、蒙古の鬼の首を埋めたという岩屋で僧が鬼に変身します。鬼会の鬼は、国東という境界地帯に出現した異界の鬼（隼人、新羅、蒙古の鬼）であり、その鬼の力を取り込んだ僧侶が福を人々に与えるという祭会です。今日も修正鬼会は、寺院の法会であると同時にムラの祭として続けられています。現在、六郷満山は天台宗寺院33か寺と岩屋などの霊場で構成されています。



六郷満山①

胎蔵寺・熊野磨崖仏

豊後高田市　田染郷（田染荘）・田原山（鋸山）

巨大な磨崖仏が信仰の深さを物語る「峰入り」出発点の“山の寺”

平安時代に熊野磨崖仏が彫られ、鎌倉時代は本山の大日岩屋・不動岩屋、南北朝時代には本山末寺の今熊野寺（岩屋）、江戸時代に今熊野山胎蔵寺と呼ばれていました。本堂から熊野社に続く石段の中ほどにある熊野磨崖仏は国指定重要文化財・史跡です。

〈参道散策〉

熊野集落入口の石の鳥居をくぐると…

鍛冶屋坊と妙現坊の跡があり、熊野集落周辺は配下のお坊さんたちが住んでいた10の坊からなる胎蔵寺の境内でした。このお寺のお坊さんたちが山麓を切り開いて田畑に変え、領地を広げながら、坊も広がっていったと考えられます。

境内に上がると…

主のお坊さんが住んでいた本坊跡で、石段の両側には江戸時代末の文久3年（1863）作の石造仁王像Ⓐが立ち、石段を登ると本堂Ⓑと護摩堂Ⓒが建ちます。本堂の横の収蔵庫Ⓓには、熊野社Ⓖに祀られていた熊野社の神を仏の姿であらわした懸仏３面（県有形文化財）があります。神仏習合の歴史を知るものとして重要な文化財です。

奥の院の石の鳥居Ⓔをくぐると…

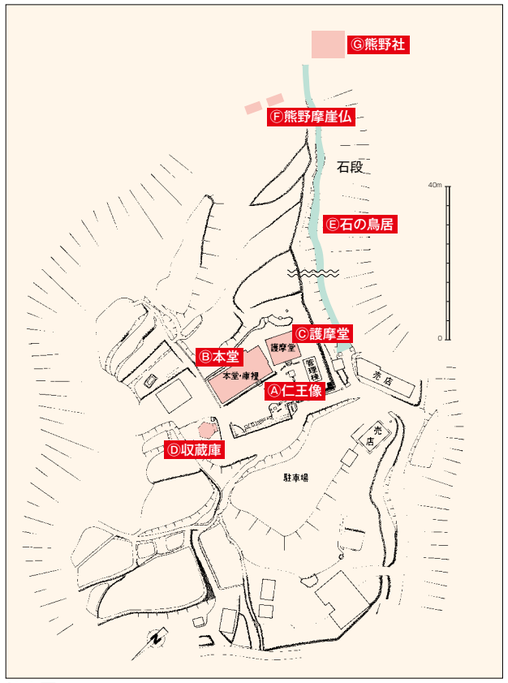
鬼が一夜にして築いたと言われる荒積みの石段があります。お坊さんたちは、この魔所で心の中の鬼を追い払いながら修行を重ねていたのでしょう。

石段を登ると左手に…

２体の磨崖仏Ⓕがそそり立ち、（右）大日如来像は高さ７ｍで平安時代中期の作、（左）不動明王像は高さ８ｍで平安時代後期の作とされています。いずれも肩から下は彫りが浅く、その姿が描き出されていませんが、悟りの境地に達したお坊さんが、今まさに岩の中から現れようとする仏の姿を刻んだと言われています。また、10年に１度の「峰入り」の際には、磨崖仏の前で採灯（さいとう）護摩があり、６日間 約150キロの修行の旅に出るのです。

石段を登りつめると…

修行の守り神である熊野社Ⓖが建っています。普通、六郷満山の“山の寺”では、宇佐神宮から迎えた修行の守り神：六所権現を祀るのですが、こちらは異なっています。



境内図

六郷満山②

長安寺（県史跡指定）

豊後高田市　来縄郷（都甲荘）・屋山

六郷満山の惣山、四季折々の花に囲まれた“山の寺”

平安時代、国東六郷山（六郷満山）の中心寺院として成立し、六郷山の三山の一つ中山に属し、屋山寺と呼ばれました。この寺院は、六郷山の住僧らが衆議（会議）を開く場所で、平安時代には巨大な梵鐘が置かれ、惣山にふさわしく「屋山太郎惣大行事」、俗に太郎天と呼ばれる権現像が安置され、裏山には、銅板法華経が埋められました。

〈参道散策〉

現在の上り道の左手にポツンと建つ鳥居Ⓐをくぐると…

参道が続き、今も数件の人家がありますが、両側の家や畠には、引寺、北ノ坊、千蔵坊、奥ノ坊、中ノ坊、両子坊、谷ノ坊などの坊の跡Ⓑが残されています。

本堂Ⓒ前には…

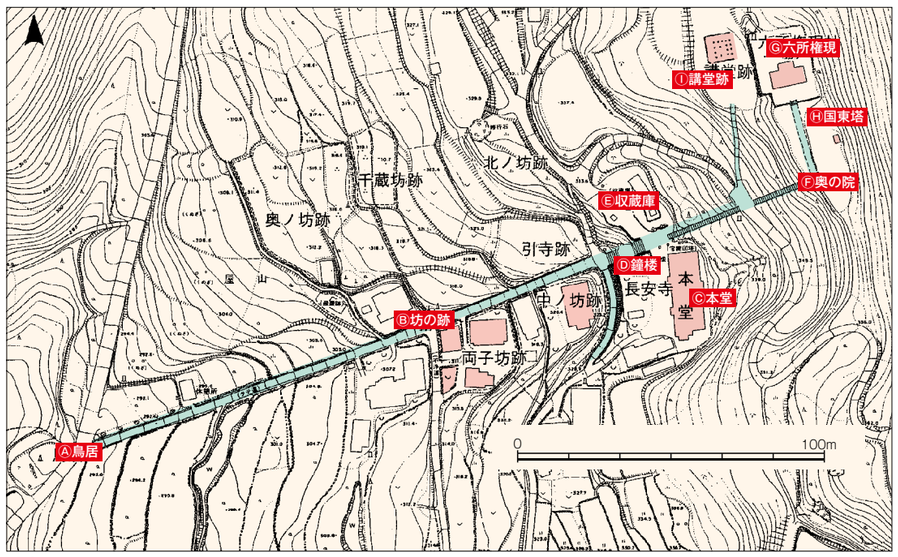
高い石の階段と高い石垣があります。右手の石垣の上には鐘楼Ⓓがあり、本堂の横には、大友家の重臣吉弘宗仭（そうじん）の七回忌の供養塔、近世初頭に長安寺を再興した豪意の墓などがあります。本堂とは反対側の左手には、収蔵庫Ⓔがあり、そこには、平安時代後期：大治５年（1130）の造立の太郎天像（高さ1.6m）と脇侍二童子像（国重要文化財）が安置されています。また、保延７年（1141）の銅板法華経（縦21.0cm、横17.8cm、筥板４枚、銅板法華経19枚、国重要文化財）と、福岡県豊前市にある求菩提山の銅板法華経（国宝）は同一作者の兄弟作品です。

本堂と収蔵庫の間の石段を登ると…

奥の院Ⓕがあります。六所権現（現身濯神社（みそぎじんじゃ））Ⓖには、かつて太郎天が祀られており、その手前には、鎌倉時代末の国東塔Ⓗが建っています。身濯神社の下には講堂跡①の礎石が残っています。かつて、ここでは、修正鬼会が執行されていました。

長安寺の裏山：屋山の頂上部には…

屋山の院主、六郷山の権別当（ごんべっとう）を兼ねた吉弘氏の山城、屋山城があります。今でも、竪堀、横堀、廓（くるわ）、土塁などの遺構が残っています。



境内図

六郷満山③

天念寺（県史跡指定）

豊後高田市　来縄郷（都甲荘）・長岩屋川の谷

厳しい修行の場：天念寺耶馬に受け継がれる「修正鬼会」のメッカ“谷の寺”

平安時代後期・鎌倉時代は中山の長岩屋、南北朝時代は中山本寺の長岩山、江戸時代に長岩屋天念寺と呼ばれていました。中世までの長岩屋は、大字長岩屋の全集落が境内地であり、15世紀の初頭には62か所屋敷がありました。この全体が住僧と呼ばれ、寺の法会はムラ全体で行われてきました。

〈参道散策〉

川の中の岩屋…

長岩屋川に室町時代作の高さ270㎝の不動明王と矜羯羅童子・制多迦童子の二童子が刻まれた磨崖仏の川中不動Ⓐがあります。大雨の度に氾濫を繰り返す長岩屋川の天念寺の水害避けに造られたと言われています。

川下から参道を歩くと…

切り立った岩壁に江戸時代の茅葺き屋根で懸崖造りの講堂Ⓑが建っています。堂内には岩窟を仏壇として、木造薬師如来像や木造聖観音菩薩立像が祀られています。六郷満山の代表的祭り：修正鬼会がこの講堂で毎年の旧暦正月７日に奉納されますが、天念寺本堂の東隣の「鬼会の里」Ⓔのビデオシアターでいつでも追体験ができます。

講堂の東隣には…

身濯神社Ⓒがあります。この神社はかつて六所権現と呼ばれていました。普通は修行の場であった奥ノ院とともに祀られていますが、背後の岩壁が修行の場そのものだからだと思われます。

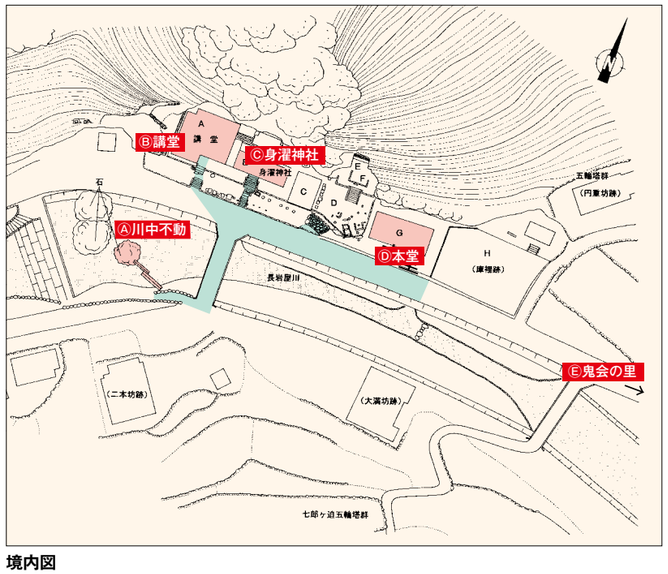
身濯神社の東側には…

院主が住んでいた本坊跡の本堂Ⓓが建っています。堂内には平安時代作の高さ93㎝の木造釈迦如来坐像、高さ97.2・87.9㎝の木造日光・月光菩薩立像、高さ109㎝の木造吉祥天立像（すべて県有形文化財）が安置されています。奈良の仏像の華麗さや京都の優雅さはないが、悟りの境地に達したお坊さんが一本の木から現れんとする仏の姿を刻んだと言われています。

寺の背後「小山」には…

かつては岩壁のいたる所に岩屋が開かれていました。その中の小両子岩屋に祀られていた平安時代後期作の高さ198㎝の木造阿弥陀如来立像（国重要文化財）、本堂に祀られていた平安時代後期作の高さ97.5㎝の木造勢至菩薩像（県有形文化財）や江戸時代後期作の木造千手観音菩薩立像が、現在「鬼会の里」Ⓔに展示されています。

また、岩壁を見上げると、そびえ立つ奇岩を結んで、邪心ある者が渡ると落ちると伝えられる石の無明橋が架けられ、修行の厳しさを今に伝えています。



境内図

六郷満山④

千燈寺跡（県史跡指定）

国東市　伊美郷（伊美荘）・不動山

仁聞菩薩が六郷満山の最初に開き、最期を迎え、そこに眠るとされている“山の寺”

平安時代後期・鎌倉時代は中山の千燈寺岩屋、南北朝時代は中山本寺の千燈山、江戸時代に12坊をかかえた補陀落山・千燈寺と呼ばれるようになりました。

〈参道散策〉

参道をたどっていくと…

石垣のみの４つの坊屋敷跡があります。ここはお坊さんが住んでいた西の坊跡Ⓐ、その先に本堂跡Ⓑがあります。そこには、高さ約160㎝の石造仁王像Ⓒが立っています。

さらにたどると…

山王権現Ⓓと講堂Ⓔの跡があります。講堂はかつて六郷満山の代表的祭り：修正鬼会が奉納されていました。現千燈寺には、江戸時代初頭1610年作の修正鬼会面４面（県有形民俗文化財）が伝えられています。

参道が分かれていて、右手をたどると…

墓地であった弘法堂跡Ⓕにつきます。ここには千燈寺で亡くなった仁聞菩薩の墓Ⓖと伝えられる高さ202㎝の国東塔（県有形文化財）が建っています。その周囲には高さ約140㎝の石の五輪塔が囲んでいます。そこを抜けると、さらに1000基以上の五輪塔群Ⓗがみえてきます。仁聞菩薩の墓に供える千の燈火を千の石塔に託した一大墓地なのです。

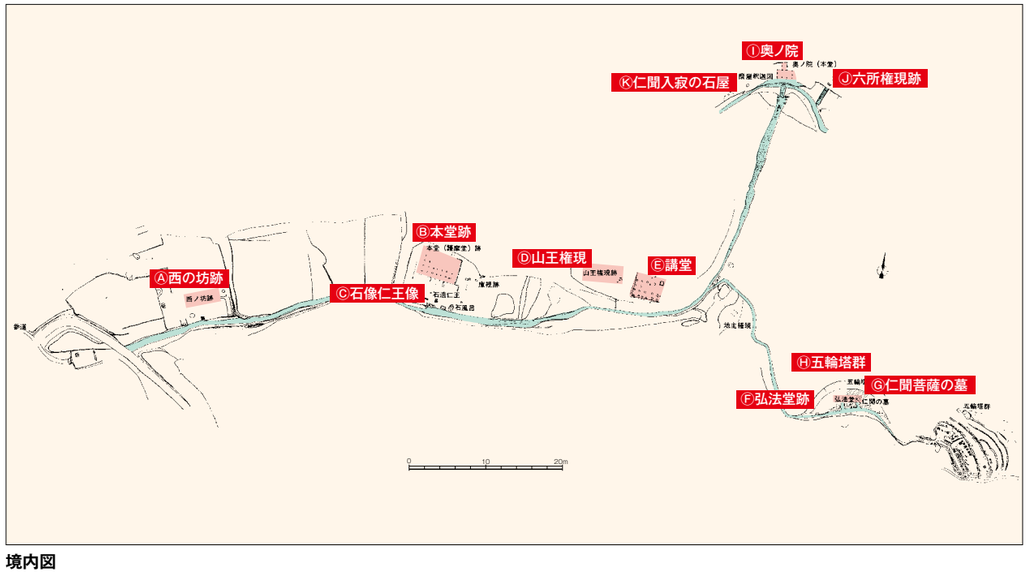
左手をたどると…

千年前の修行の場であった懸崖造りの奥ノ院Ⓘがあります。その右の岩窟には六所権現跡Ⓙがあります。奥ノ院に向かって左の岩窟には、仁聞入寂の石屋Ⓚがあり、六郷満山を開いた仁聞菩薩の霊が祀られていると伝えられています。

不動山山頂には…

秘所と呼ばれる五辻不動があり、仁聞菩薩と同行４人のお坊さんたちが修行したと伝えられています。

明治に入って、山の中にあった千燈寺と山麓にあった下払坊が合併した現千燈寺になりました。かつて千燈寺に安置されていた鎌倉時代作の木造如来坐像（県有形文化財）、六所権現に建てられていた平安時代後期作の高さ59㎝の石造宝塔（県有形文化財）などが所蔵されています。



境内図

六郷満山5

岩戸寺（県史跡指定）

国東市　国東郷・来浦（くのうら）川上流

最古の石造物：仁王像・国東塔が残る樹木に囲まれた“山の寺”

鎌倉時代は中山の岩殿岩屋、南北朝時代は末山本寺の岩戸寺、江戸時代に石立山岩戸寺と呼ばれていました。

〈参道散策〉

参道の入り口には…

室町時代後期1478年作で高さ141・135㎝の石造仁王像Ⓐ（県有形文化財）が立っています。製作年が刻まれた像として、日本で最も古い石造仁王像です。

参道を登ると…

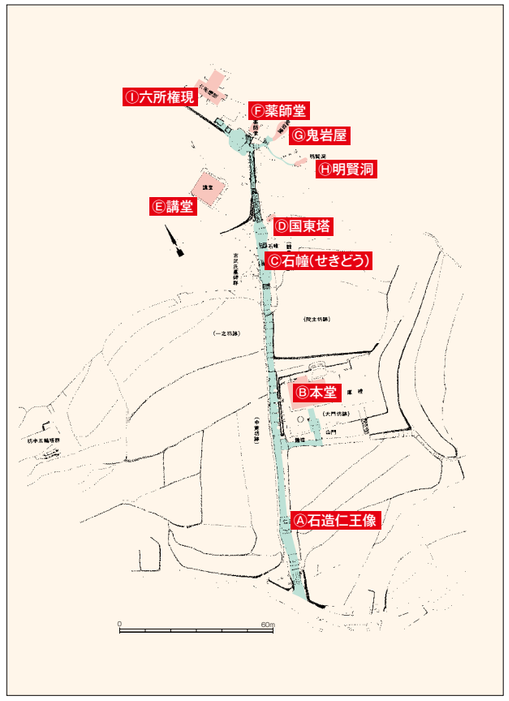
今は本堂Ⓑが建っていますが、かつては配下のお坊さんが住んでいた僧坊：大門坊の跡であり、室町時代にはもう３坊があった場所です。その上は院主さんが住んでいた本坊跡になります。

六柱社の石の鳥居をくぐると…

２基の石塔が立っていますが、右が参道の入り口の仁王像と同じ1478年作で、高さ253㎝の石幢（せきどう）Ⓒ（県有形文化財）、その先が鎌倉時代後期1283年作で高さ329㎝の国東塔Ⓓ（国重要文化財）で、国東塔の中で最も古いものです。2011年の解体修理の調査で、中からノミや銭などの納入品が発見されました。国東塔の左手には、江戸時代の茅葺き屋根が美しい講堂Ⓔ（学問と法会の場）が建ち、平安時代後期作で高さ82.3㎝の木造薬師如来坐像（県有形文化財）が祀られています。この講堂で隔年の旧暦正月７日に修正鬼会を奉納します。成仏寺と交代で行われ、西暦で言うと奇数年にあたります。

参道を登りつめると…

奥ノ院にたどり着きます。その岩窟の中に建てられた薬師堂Ⓕには、平安時代後期の仁聞菩薩による作と言われる高さ95.6㎝のカヤの一木造り：木造薬師如来坐像（県有形文化財）僧明賢が明石浦で拾った蒙古の将の首を納めた所といわれています。奥ノ院に向かって右手には、蒙古の将の首を納めた鬼岩屋Ⓖや明賢洞Ⓗの岩窟があり、千年前の修行の場であったと考えられます。奥ノ院に向かって左手の、切り立った岩壁を背にして建つのが江戸時代建築の六所権現Ⓘです。



境内図

六郷満山6

文殊仙寺（県史跡指定）

国東市　国東郷・文珠山

そびえ立つ奇岩奇峰と太古の自然林に囲まれた神仏が宿る“山の寺”

飛鳥時代に役行者が開いたとも、奈良時代に仁聞菩薩が開いたとも伝えられています。南北朝時代には末山本寺の文殊仙寺、江戸時代には我眉山文殊仙寺と呼ばれていました。

〈参道散策〉

参道の入り口には…

左手に２軒の民家が建っていますが、お坊さんが住んでいた坊の跡で、他にも坊がありました。山がすべて境内だったのです。

参道を登ると…

室町時代作で、高さ180㎝の石造仁王像Ⓐ（県有形文化財）が立ち、石の仁王像としては岩戸寺の像とともに日本最古級です。

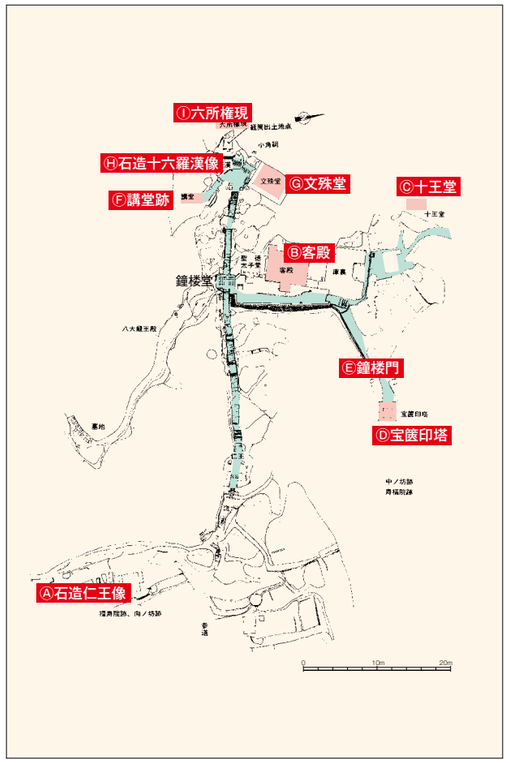
さらに登って惣門をくぐると…

本堂である客殿Ⓑがあり、こちらでは、写経・座禅体験ができます。室町時代中期1456年作で、堂の軒下に吊るされていた直径31㎝の銅鰐口（わにぐち）（県有形文化財）があります。その右手奥の岩窟にある十王堂Ⓒには、室町時代前期1378－1379年作で、地獄で死者を裁くという高さ約53㎝の石造十王像（県有形文化財）が祀られています。その左手奥には、江戸時代後期1833年作で、高さ約9mもある宝篋印塔Ⓓが建っています。参道に戻って鐘楼門Ⓔには室町時代の前期1397年作で、高さ95.8㎝の梵鐘（県有形文化財）があります。

参道を登りつめると…

左手に講堂跡Ⓕがあり、右手には懸崖造りの奥ノ院：文殊堂Ⓖがあります。堂内には岩窟を仏壇として、秘仏の文殊菩薩が祀られ、文殊泉と呼ばれる水が湧いています。文殊堂の向かって左手にある行者堂の跡は、小さな岩窟で役行者（えんのぎょうじゃ）を祀っていると言われています。

その左手の崖にはお釈迦様の弟子である石造十六羅漢像Ⓗを祀っています。その左上には平成４年に再建された六所権現Ⓘが建っています。



境内図

六郷満山⑦

両子寺（県史跡指定）

国東市　武蔵郷・国東半島最高峰：両子山

国東半島の中央に位置し、近世六郷満山を統率した「峰入り」終点の“山の寺”

奈良時代に仁聞菩薩が開いたと言われ、鎌倉時代は六郷満山の末山の中心寺院、江戸時代は杵築藩の祈願所として足曳山両子寺と呼ばれ、「峰入り」行復興の中心にあり、六郷満山寺のリーダーとなりました。

〈参道散策〉

両子集落から参道を登り…

無明橋Ⓐを渡ると、江戸時代後期作で高さ230の２体の石造仁王像Ⓑが建ちます。石段の左右には配下のお坊さんが住んでいた坊跡が残っています。

御成門Ⓒの左手に…

護摩堂Ⓓが建っています。堂内には、鎌倉時代後期作の木造不動明王像、江戸時代作の仁聞菩薩坐像などが祀られています。ここは申し子袋を用いた子授け祈願で名高い寺です。また、こちらの両子寺では、写経・座禅体験ができます。

さらに谷川を渡ると…

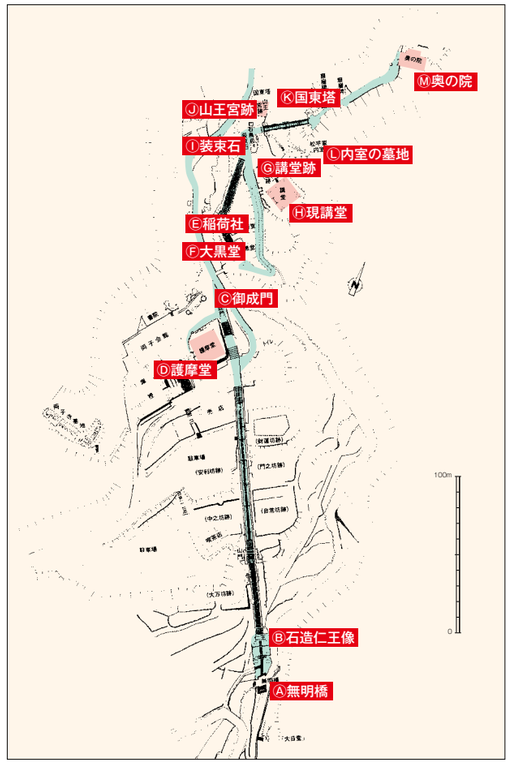
稲荷社Ⓔ、大黒堂Ⓕがあります。右手にはかつて修正鬼会が奉納されていた講堂跡Ⓖがあります。江戸時代前期1618年作のかつて修正鬼会に使われた木造鈴鬼面２面（県有形民俗文化財）が守り伝えられています。その背後には現講堂Ⓗが建ち堂内には鎌倉時代後期作で高さ167㎝の木造阿弥陀如来坐像（県有形文化財）が祀られています。

石の鳥居の前まで来ると…

その前には、修行の際に装束や草履を取り変えたと言われる装束石（長さ4.8ｍ）Ⓘが置かれています。左手には山王宮跡Ⓙがあり、その奥には高さ450㎝の国東塔Ⓚ（県有形文化財）が建ちます。

石の鳥居をくぐると…

杵築藩主・内室の墓地Ⓛがあります。その先に岩屋を背負う江戸時代建築で懸崖造りの奥ノ院Ⓜが建って、千手観音菩薩像・宇佐八幡神を祀っています。



境内図

コラム

六郷満山の二大行事

太古の昔、国東は国の先端で、宇佐とともに異界地との国家的な境界線と考えられていました。時代の流れとともに、それは隼人との境界線となり、朝鮮・新羅との境界線となり、蒙古との境界線となりました。人々は外の世界の人たちを鬼と見て畏怖したのです。その鬼のパワーを自分に取り込んで修行し、人々にパワーを与えたと言われる仁聞菩薩の境地を目指し、お坊さんたちが国東半島に修行に入りました。そして、六郷満山の二大行事が生れたのです。

峰入り

仁聞菩薩の境地を目指し、天台宗の僧侶が国東半島一帯に残る仁聞菩薩のゆかりの地をたどる行事です。855年に宇佐の能行上人が津波戸山で八幡神の化身：仁聞菩薩の声を聞いたことにより始まったと伝えられています。天台宗の僧侶が、70年におよぶ仁聞菩薩の国東半島修行の地をたどる行事です。
中世では僧侶個人の法力を高める個人行として行われていましたが、元禄年間になって両子寺を中心に集団峰入りが行われるようになり、昔は約１カ月かけて160か所以上の祈祷場をめぐったといわれていますが、戦後は10年に一度６日間をかけて行われるようになりました。

峰入りは、初日に八幡神が最初に現れたとされる御許山の頂でホラ貝の音とともに始まります。続いて神事を行い、開白護摩が焚かれ、白装束にわらじ・錫杖を持って歩く道中の安全を祈願します。それから宇佐神宮に参拝します。２日目、熊野磨崖仏で採灯護摩を焚き、田染荘、天念寺等 各霊場を巡りながら、約150キロの修行に出発します。最終日、両子寺で結願護摩を焚いて、すべての行程を無事に終え満願成就を迎えます。

修正鬼会

修正会は昔から行われていましたが、仁聞菩薩が養老年間（717 ～ 724年）に六郷満山28寺の僧侶を集めて行った火祭りが修正鬼会の始まりとされています。1200年以上の歴史があり、国重要無形民俗文化財となっています。現在は天念寺は毎年（旧暦正月７日）、国東町の岩戸寺（旧暦正月７日直前の土曜日）と成仏寺（旧暦正月５日直前の土曜日）は１年交代で行われています。

初めにお坊さんたちが講堂内で読経する、昼の勤行が行われます。松明入れ衆が垢離取り（心の汚れを落とし清める）で身を清めた後、長さ５ｍの大松明に火がつけられます。お坊さんたちは講堂内で読経をし、夜の勤行を行い、そのあと香水棒の舞を奉納します。クライマックスで、鬼たちが登場します。お坊さんたちが扮したこの鬼たちは神や仏の化身です。鬼を追い払うというのではなく、国東半島に出現する鬼の恐ろしく強力な力を福に変えて、人々にしあわせをもたらす鬼の姿をした仏を出迎えるのです。

鬼たちは、みそぎを受けて講堂内で踊った後、五穀豊穣・無病息災を祈願する「オーニワヨー、ライショハヨー」などのかけ声とともに、燃え盛る松明を振り回しながら境内を走り回ります。この松明でたたかれると、一年の無病息災を約束されると言われています。

この鬼ですが、天念寺では荒鬼・災払鬼が登場します。

そして、成仏寺と岩戸寺では荒鬼・災払鬼・鎮鬼が登場し、祭りの後に寺を出て、地域の民家でもてなしを受ける風習があります。
また、鬼の目を覚ますために胡椒を混ぜた辛いお餅が売られたり、最後にお餅まきをする所もあります。

六郷満山8

真木大堂（伝乗寺跡）

豊後高田市　田染荘・桂川流域の里

六郷満山最大の規模を誇り、お坊さんたちが学問に励んだ“里の寺”

平安時代中期、ここ上野条里水田は田染荘の中心で、その水田を一望できる位置に、領主：宇佐神宮が建立した時には名前も定かで無く、鎌倉時代は本山の喜久山、南北朝時代は本山本寺の馬城寺、江戸時代は馬城山伝乗寺と呼ばれていました。

〈参道散策〉

境内に入ると…

入口左手に鐘楼Ⓐがあります。正面には平成20年改修の収蔵庫Ⓑが建っています。収蔵の９体全てが国重要文化財に指定されています。

木造阿弥陀如来坐像は本尊で、平安時代中期作で高さ216㎝の桧の寄木造りです。

木造四天王立像（持国天･増長天･広目天･多聞天）は、平安時代後期作で高さ216㎝です。

不動明王像は、平安時代中期作で高さ255㎝で、二童子像は矜羯羅童子が高さ127㎝・制多迦童子が高さ130㎝です。

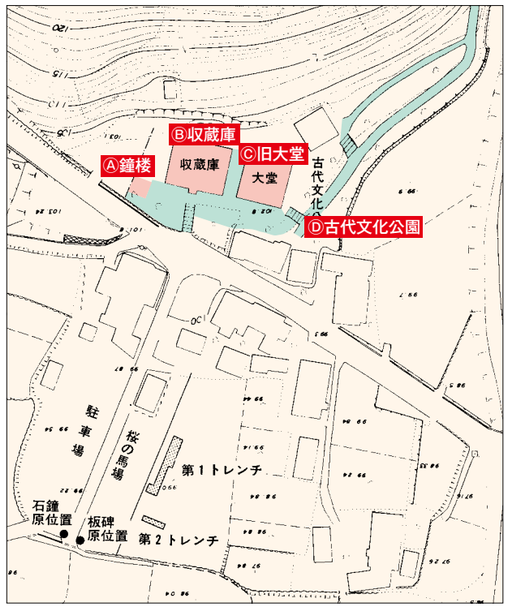
木造大威徳明王像は平安中期の傑作で高さ241㎝で、この種の像としては、日本最大です。仁聞菩薩が材木を牛の背中に乗せて運んでいたら、真木のこの場所で牛が動かなくなり、材木でお寺を建てて、仏を刻んだと言われています。

収蔵庫の隣には…

旧大堂Ⓒがあり、２体の仁王像に安置されています。正面の扉に菊の花の紋章がありますが、これは700年前の蒙古襲来の折り、異国降伏の大祈祷を長期にわたり行った際、朝廷より賜ったものと言われています。

本堂の北隣には…

国東塔や五輪塔など石造美術品170点を集めた遊歩道を散策できる古代文化公園Ⓓがあります。本堂の裏の山には六所権現の跡があり、山頂からは田染荘が一望できます。



境内図

六郷満山9

富貴寺

豊後高田市　田染荘・蕗川流域の里

四季折々に輝く国宝の大堂が佇む“里の寺”

宇佐神宮の大宮司家一族の氏寺で、鎌倉時代は蕗浦阿弥陀寺、南北朝時代は本山末寺の富貴寺、江戸時代は蓮花山富貴寺と名乗る。

〈参道散策〉

参道をたどっていくと…

南北朝時代1362年作で高さ134㎝の板碑Ⓐ、十王５体を刻んだ南北朝時代作で高さ130㎝の十王石殿２基Ⓑ（どちらも県有形文化財）、また六地蔵を刻んだ室町時代前期作で高さ235.6㎝の石幢・六地蔵石Ⓒがあります。山門では、江戸時代作で高さ167㎝の石造仁王像Ⓓが迎えてくれます。

山門をくぐると…

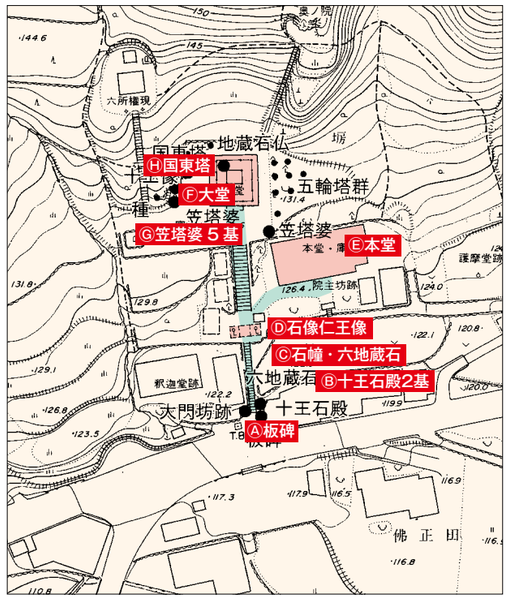
右手に本堂Ⓔがあります。堂内には平安時代後期作の木造阿弥陀三尊像と木造仮面３面（どちらも県有形文化財）が遺されています。また、こちらでは、座禅体験（拝観時間外で）ができます。

石段を登ると…

大堂Ⓕ（国宝）が現れます。平安時代後期作で、当時この世の極楽と言われた京都宇治･平等院鳳凰堂と平泉･中尊寺金色堂と並び称される“日本三大阿弥陀堂”の１つに数えられる九州最古の木造建築物です。大堂の中に入ると、本尊の阿弥陀如来像は平安時代後期作で高さ85.7㎝です。大堂と阿弥陀如来像は、970丈にも及ぶ一本の榧の巨木から仁聞菩薩の手によって造られたと伝えられています。また、大堂内には600体以上のみ仏と極楽浄土の世界を描いた大堂壁画（国重要文化財）が施されており、年月と戦災等により風化が激しいが、極彩色で描かれていました。大堂・阿弥陀如来・大堂壁画と、都ぶりの優雅な作風は、宇佐神宮の大宮司がその富をかけて都から大工・仏師・絵師をよびよせて造らせたものです。宇佐市の県立歴史博物館には、彩色の調査に基づいて忠実に彩色が復元されたお堂が再現されています。

大堂の周囲には…

鎌倉時代中期1241 ～ 1268年作で高さ115 ～230㎝の笠塔婆５基Ⓖ（県有形文化財）、南北朝時代作で高さ321㎝の国東塔Ⓗ・室町時代の地蔵・十王・脱衣婆の石像などもあります。



境内図

【中世】宇佐・国東半島

ストーリー

国東半島には、両子山から放射状に広がる２８の谷があります。千数百年の昔、この半島には、六郷と呼ばれる六つの郷が置かれました。その一つが田染（たしぶ）の郷です。田染地区の中心部の上野や嶺崎には、「条里」という古代国家が施行した地割が圃場整備前までは残っていました。宇佐八幡宮は、10世紀から11世紀にかけて藤原道長などの権力者と結び、九州全域に荘園を拡大し、九州の３分の１を所有する大領主となります。田染の郷の水田も宇佐八幡宮が支配するところになり、その根本荘園の「本御荘十八箇所」の一つに組み込まれました。特に、小崎地区は田染神主の田染氏が拠点を構えた場所で、古代から雨引社の湧水、小崎川の水を利用した水田の開墾が始まり、土地の地形を利用して様々な曲線を描く、不揃いな形の水田が開発されていきました。

1980年ごろから、全国で圃場整備事業が進行する中で、これに対処するための調査が現県立歴史博物館の手で進められ、５年にわたる調査で、小崎地区は水田の形態、水利のあり方，周辺の景観が昔のままで残っていることが明らかにされました。これによって、800年前の中世の荘園の姿を守り受け継ぐ運動が始まりました。また、景観は、宮崎駿のアニメーション映画『おもひでぽろぽろ』の舞台となった山形蔵王の山村と重なり、その癒しとやすらぎの空間として注目されるようになっています。2010年８月には、田染荘小崎が国の重要文化的景観（景観の国宝）に選定され、さらに2011年には、荘園の里推進委員会の活動と田染の景観が日本ユネスコの未来遺産に登録されました。

スポット紹介

田染庄 小崎地区 地図

1 雨引社Ⓐ

写真提供：荘園の里推進委員会

田染荘：小崎の水田開発の原点ともいえる場所です。ここには昔、日照りの時でも涸れない水が沸き出していたそうです。米作りに水は欠かせないので、地元の方々は昔からここを水の神様として信仰してきました。

2 中世の水田

青空と緑色の田んぼのコントラストが美しい田染荘。ここは人と自然とが共存する“里の原風景”が、鎌倉時代までにできあがり、土地の利用の仕方も当時のままで、その姿をほとんど変えることなく残されています。

田んぼと田んぼの間の畦を切って、隣に水を流していく灌漑システム（田越し）は、少ない水を有効利用し、かつ水を汚さない環境にやさしい先人の知恵です。トンボやホタルなど、絶滅危惧種を含む貴重な水生生物も数多く棲んでいます。

3 台薗集落

800年前、小崎地区の現集落となっているところは荘園の管理者である宇佐神宮神官：田染氏の居館跡で、尾崎屋敷Ⓑ、飯塚屋敷Ⓒ、為延屋敷Ⓓ（現在はタネノブとされている）の名称や土塁が今も残っており集落の原形がこの時代に出来上がりました。

4 延寿寺Ⓔ

廃藩置県後の江戸時代に浄土真宗の寺院になりましたが、それ以前は荘園領主：田染氏の屋敷でした。境内の石殿（入母屋造りの屋根の家の側面に仏像を彫り出した石造物）に、宇佐栄忠の名前が刻まれています。この事から、宇佐神宮の神官がこの地に任ぜられて田染氏に改名をし、領主としてこの地を治めていった事がわかります。敷地内には、小崎稲荷、石造物や土塁などが残っていて、田染氏の権力の大きさがしのばれます。

トピック

荘園領主制度

田染荘の景観保全や地域と都市の住民交流を目的に、2000年に始まった水田オーナー制度です。毎年、県内外の140人前後が荘園領主（一口３万円）になっています。領主には収穫した米や野菜が届けられるほか、御田植祭や収穫祭で、早乙女や中世の衣装を着て参加できる交流イベントもあります。

間戸岩屋（間戸寺）跡Ⓕ

田染荘の中央に、国東半島独特の奇岩：間戸耶馬があります。1000年前、鬼が棲むと言われた山には村人は一切近づきませんでした。その山に入ったのは、“山の寺”六郷山の修行僧たちです。現在では建物はありませんが、修行した奥の院や小岩屋が残っていて、天台宗：六郷満山寺院の僧侶が生涯で一度は参加しなければならない峯入りの修行コースになっています。

また、金毘羅展望台からは、中世の景観がそのまま残る田染荘全体が臨めます。ここは六郷満山の山の世界と里の世界が共存している場所なのです。

朝日観音Ⓖ

朝日が昇る東の方向に、修行の証として岸壁に窟を掘り、岩屋の中に仏像を祀りました。いずれは雨ざらしで朽ち果てると言う事がわかっていても、自然の木を一木で彫ったものだと伝えられています。

夕日観音Ⓗ

西向きの夕日が射す岩屋に石仏や木仏を彫って祀りました。

穴井戸観音Ⓘ

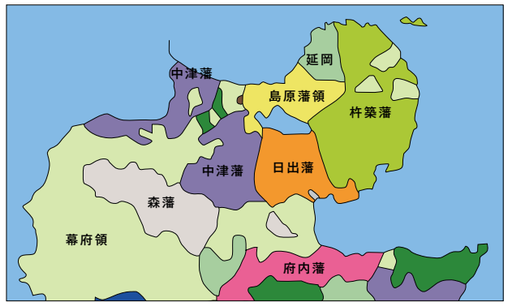
間戸耶馬のふもとの洞窟の奥に祀られています。洞窟の天井からしたたり落ちる水に濡れており、別名を濡れ観音と呼ばれ、どんな日照りでも水が絶える事がありません。この水滴を“山の寺”の開祖：仁聞菩薩から名前を取り、「仁聞の隠れ水」と呼び、体に付けると知恵が付くと言い伝えられています。

【近世】中津・杵築・日出

豊臣秀吉は、1587年に九州を平定しました。島津・大友ら九州の戦国大名には、旧領支配を認めるとともに、豊前や肥後には自らの取立大名を配置しました。

1593年の文禄の役後には、大友氏の領地を没収し、小大名を配置しました。その結果、豊後には個性的な藩が誕生し、小藩分立体制が始まりました。

中でも、学びの城下町＝中津、坂の城下町＝杵築、海の城下町＝日出は、それぞれの個性をもった近世＝江戸時代の雰囲気を今も伝える町づくりが行われ、三都めぐりが楽しめます。



中　津

ストーリー

学びの城下町

“此の城は黒田如水のはじめて築き給ふよしいへり 此辺所々城地を見そなはし給ひしが 此辺最よしとて定め給ふ 城は町の北海辺にあり 天守なし 此城の東を嶋田口といふ 西を小今井口と云ひ”

（貝原益軒）

元禄７年（1694）黒田家譜編纂のために、故地調査をした貝原益軒の「豊国紀行」の描写です。

山国川河口のデルタ地帯に位置する中津地方は、豊前国下毛郡に属し、古代以来、宇佐神宮との関係も深く、様々な文化が展開していました。鎌倉時代には東国武士の宇都宮氏が下向し、野仲・成恒（なりつね）氏などが、宇都宮氏の一族と称し、豊前各地に勢力を浸透させていきました。しかし、その後豊前全体は九州の大友、中国の大内・毛利氏のせめぎ合いの場であり、そのなかで土豪たちは存続していました。

天正15年（1587）、九州平定を終えた豊臣秀吉は、豊前に軍師として活躍していた黒田官兵衛孝高（よしたか）（如水）を配置しました。黒田氏は、山国川河口に城地を定め、中津城の造営に取り掛かりました。その後、慶長５年（1600）に九州の関ヶ原といわれた石垣原の合戦で大友氏に勝利し、豊後・九州の諸大名を東軍に組させた功績によって筑前福岡に転封となりました。

代わって中津城の城主となったのは、細川忠興（ただおき）（ガラシャの夫、三斎）でした。はじめ中津を居城としましたが、翌年には小倉を本城とし、中津は支城となりました。一国一城令にも関らず、幕府に働きかけて中津城を存続させ、城や城下町の造営を行いました。忠興は、家督を嫡男忠利（ただとし）に譲り、自分は中津城に入ります。そして、宇佐神宮や薦社の復興を進め、中津城は本丸・二の丸、三の丸、八門、二二の櫓を設け、城下町の原型を造りました。

寛永９年（1632）、細川氏の熊本転封によって、中津城には小笠原長次が八万石で入城し、新田の開発や、城下町の整備を完成させました。

また、忠興の時代に工事が始まった「御水道」と呼ばれる上水道施設が完成し、中津城下に水道が引かれました。

元禄11年（1698）、第３代藩主：小笠原長胤（ながたね）は失政・日常の不行跡を咎められ領地没収され、弟の長円（ながのぶ）が半滅の４万石をもって跡を継ぐことになりました。しかし、長円も38歳で没し、後を継いだ５代藩主の長邕（ながさと）も７歳で亡くなりお家断絶となってしまいました。

享保２年（1717）、新しい城主奥平昌成（まさしげ）は丹後宮津から十万石で中津に入封し、以後奥平氏が９代150年にわたって支配しました。この間に藩札の発行、倹約令の発布などを行いました。

また、奥平氏の最大の功績は学問の推進にあります。第３代昌鹿（まさか）は蘭学を奨励し、江戸詰めの中津藩医であった前野良沢を援助しました。島津重豪の次男で奥平家の養子となった第５代昌高は、「蘭癖大名」の１人として知られ、自ら蘭学を学ぶだけでなく、中津辞書（「蘭語訳撰」「中津バスタード辞書」）を編纂させ、出版するなど大きな功績を残しました。また最後の藩主13代昌邁（まさゆき）は、明治４年に慶應義塾に入学後、福澤諭吉らの勧めによりアメリカに留学し、帰国後に西日本有数の英学校である中津市学校を創設するなど、教育に熱心に取り組みました。

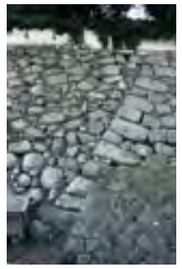
スポット紹介

■本丸 二の丸

1 中津城

中津城は、九州最古の近世城郭であり、当時の石垣が現存する唯一のお城です。

本丸と三の丸の間の石垣では、「反らない」、「加工した石を使わない」といった、黒田氏が築城した天正時代の石垣の特徴を見ることができます。



また、山国川沿いの石垣・本丸北側の石垣では、古代山城に用いられていた四角い石を再利用しているところが確認できます。

本丸北側では、黒田氏とその後中津藩主となった細川氏が築いた石垣の境を見ることができます。

中津と周防灘が一望できる天守閣は昭和39年に造られたものですが、今では中津市のシンボルとなっています。

天守閣には徳川家康のひ孫にあたる奥平忠昌が家康から拝領した白鳥の槍、日本で初めて鉄砲が大量に使われた長篠の戦の絵、「解体新書」を編纂した中津藩医の前野良沢など蘭学の里を彩る偉人たちの資料や、父親が中津市出身の双葉山の化粧回しなど、歴史的にも興味深い資料が展示されています。

また中津城公園内には、奥平神社、中津大神宮、城井神社、金比羅宮、中津神社とそれぞれ由緒ある神社があります。

■武家屋敷

2 福澤諭吉旧居

城下町の北に下級武士の町がありました。ここにはかつて福澤諭吉が幼年期をすごした家（旧宅）があり、現在は敷石が残っています。

その隣に建っている福澤諭吉旧居は、少年期を過ごした家です。華美なものはなく、下級武士の質素だった生活が垣間見えます。昭和46年に国の史跡に指定されました。

敷地内には、諭吉の少年時代のエピソードを物語る「しらみ取りの石」や「お稲荷様」があり、また自らの手で修理したという仕事部屋兼勉強部屋の「土蔵」もそのまま残っています。

隣接する福澤記念館には、遺品・遺墨・著書「学問のすゝめ」の原本などの他、福澤の門下生、家族、中津との関わりを示す資料などとともに、日本銀行から贈られたナンバー１Ｂの貴重な一万円札が展示され、福澤の偉業をたたえています。

■福澤諭吉（1835 ～ 1901）

父：百助が大阪の中津藩蔵屋敷に勤めていたため生まれは大阪ですが、一歳半の時父の急死により、母：お順に連れられて家族とともに中津に移りました。

福澤は勉強熱心で長崎や大阪でオランダ語を学びました。そして、慶應義塾の前身となる蘭学塾を開くことになります。

また、これからは英語だと思うと、オランダ語をやめ、アメリカに目を向けました。咸臨丸でアメリカへ渡航した後、ヨーロッパを視察し見聞を広め、西洋文明を日本に紹介するに至りました。

故郷のためには、売りに出されていた耶馬溪競秀峰の土地を購入して他人の手によって景観が損なわれることを防ぐなど、『ナショナルトラスト』の先駆者でもあります。

3 自性寺・大雅堂

奥平藩主の歴代の菩提寺で、中津城の裏鬼門に造られています。

本堂隣に建てられた大雅堂では、江戸時代の文人画家・池大雅の書画が多く展示されています。京都から妻を伴ってきた大雅は、豊前の風光明媚さに心奪われ、殿様が休まれるための書院で暮らし、書画に没頭したということです。全国では珍しく、47点もの書画が保存展示されています。

4 おかこい山

自性寺の周囲には、地元で「おかこい山」と呼ばれる土塁が保存されてます。中津城は、城下町の外周や城内に堀をもつ「総構え」の構造でした。外敵の侵入を阻むため、堀だけではなく、土を盛って築いた「おかこい山」をぐるりと築き、守りを強固なものにしていました。17世紀中頃より以前に造られていたと考えられます。現在、総構えの土塁が残っているのは、九州では中津市のみです。市内数か所に見ることができ、新魚町の自性寺のおかこい山は県指定史跡、新魚町金谷口付近と鷹匠町に残るおかこい山は市指定史跡となっています。

5 中津市歴史民俗資料館

1938年建築の国の登録文化財。館内では、中津市内の考古遺物・民俗文化財を展示しています。福澤諭吉の右腕となって活躍した、小幡篤次郎の生誕地であり、篤次郎の遺言と蔵書をもとに中津図書館（小幡記念図書館）が建てられました。現在の建物は２代目になります。

■小幡篤次郎（1842 ～ 1905）

福澤のすすめで江戸に出て学び、その後慶應義塾塾長や貴族院議員を歴任し、福澤諭吉の右腕として活躍しました。西洋歯科医の始祖・小幡英之助の叔父にあたります。

■町人の町

6 村上医家史料館

代々中津藩の御典医を務めた家柄で、現在でも医者の家系が続きます。数千点にも及ぶ医学資料を所蔵し、1826年築の旧医院を利用して、奥平昌高が出版した中津バスタード辞書の下巻など、貴重な資料を展示・紹介しています。

■村上玄水（1781 ～ 1843）

村上家第７代。西洋医学の知識を積極的に追究した人物で、文政２年（1819年）に藩の許可を得て、九州初期の人体解剖を行いました。解剖の様子を詳細に記した「解臓記」､「解剖図」は史料館に展示されています。

7 大江医家史料館

中津藩の御典医を務めた大江家の旧宅です。館内では大江家所蔵の華岡流医学書や解体新書の他、心臓外科の分野で活躍した田原淳関係資料を展示しています。

館内には薬草園も設置しています。

■大江雲澤（1822 ～ 1899）

大江家第５代。華岡医塾大阪分塾に学びました。薬湯療法を行うなど、非常に研究熱心でした。中津藩医の傍ら医塾を開き、中津医学校の設立にも尽力し多くの門徒を育てました。

8 むろや醤油

享保元年（1716）創業の歴史ある醤油店です。奥平藩時代には、藩主への献上品として納められていました。現在でも、昔ながらの製法で醸造され、味を守り、市民に愛されています。

9 栗山堂

江戸時代、刀鍛冶を営んでいた祖先が、副業としてういろうを作りはじめたのが栗山堂の始まりだと伝えられています。

全国的に外郎といえば棹物が有名ですが、栗山堂のういろうは菊の形をしており、先祖伝来の製法を守っています。

■寺町

中津城下町の東南部には、寺院を集中させて建てられています。外敵が攻めてきた際に敵を城下町に直接侵入させず、広い境内に武士を待機させることができるため、防御施設の役割も果たしていました。

当時の雰囲気そのままに、通りには多くのお寺が連なっており、寺町散策が楽しめます。

10 合元寺

策士：黒田官兵衛は豊臣秀吉から、豊前に所領を与えられました。

しかし、元領主の宇都宮鎮房の抵抗に遭いました。天正17年（1589）４月、官兵衛の息子：長政の謀略により中津城での酒宴の最中に鎮房を討つに至りました。そして、合元寺で待機していた鎮房の家来たちはこの寺を拠点として奮戦しましたが、ここで最後を遂げたのです。

この戦いの時に白壁に散った血痕が幾度塗りかえても消えないので、ついには外の塀も内の壁も赤色に塗り替えられたため、「赤壁寺」と呼ばれるようになりました。今でも庫裏に点々と残された刀の痕が激戦の様子を物語っています。

11 円応寺

円応寺は、黒田時代に創建され、以後各藩主に大切にされました。寺には河童の伝説が残っており、境内には河童の墓や河童の池と伝わるものが残っています。

トピック

中津祇園

大分県三大祇園祭りの１つとして毎年7月20日以降の金・土・日の3日間、祇園車と呼ばれる山車が「コンコンチキリン」の音とともに中津の旧市内を練り歩き、辻々で停車し祇園車の上で民舞等が奉納されます。祇園車は走る文化財とも呼ばれます。

闇無浜神社を中心とする「下祇園」と中津神社を中心とする「上祇園」からなる580余年の伝統があるお祭りです。小笠原氏の時代に山車や祇園車がでるようになり、奥平氏の時代に踊り・芝居や歌舞伎が加わり、また市も開かれ盛大になりました。

和傘

江戸時代、財政難であった藩が、特産品開発政策として傘の原料である竹や和紙、柿渋などを地元で調達できることに目をつけ、和傘の製造を始めました。その発端は古博多町の植木屋与市と、塩町の塩屋嘉平でした。

幕末には、武士の内職として、和傘製造はさらに広がり、「傘は人の頭の上にさすものであるから卑しい仕事に非ず」と、武士としての気品を保ちながら、貧しい生活を乗り越えたと言われています。

当時70軒はあった和傘屋も平成15年にはすべて消えてしまいましたが、伝統復活のため平成17年に和傘工房「朱夏」が立ち上がりました。

杵　築

ストーリー

坂の城下町

“木付（杵築）は東北に海有近し 入り海有　城跡有り此の地 海魚甚多く 美酒あり 松平市正殿の居所也 城なし 街あり 木付の町は山と谷とに有りて坂多し”

（貝原益軒）

元禄７年（1694）黒田家譜編纂のために、故地調査をした貝原益軒の「豊国紀行」です。杵築城下町の景観を見事に描写しています。

杵築の城は町の東端、海に面して立地しています。町は武家屋敷は北台・南台という高台に配置され、その谷間に町屋があり、「サンドイッチ型城下町」といわれています。台地と町をつなぐために、13もの坂があり、「酢屋の坂」「勘定場の坂」「志保屋の坂」など今も江戸時代以来の名で呼ばれており、「坂道の城下町」といわれています。

細川･小笠原領時代に町割りが行われ､1645（正保２）年に３万２千石で入部した松平英親のとき、町の西端に寺町がおかれました。町に入るためには馬場尾口、寺町口、魚町口など６ヶ所の番所を通る必要がありました。この内北浜口番所が再建されています。町内は、７町（後には12町）に分けられ、町奉行の下に町年寄･組頭が置かれていました。武家屋敷は北台・南台とも に城（御殿）から近いところに上級武士が居住しており、北台の西には足軽らの住む古野があり、南台には南北の通路として東から松ヶ小路・竹ヶ小路・梅ヶ小路があります。

城下町は、領域の最奥部に位置していたため、人口集中力は低く､18世紀はじめでは1,300人弱でしたが、18世紀末には1,150人と減少しています。しかし杵築藩特産の七島藺の生産拡大によって19世紀半ばには、1,700人を超えています。産業振興が町を活性化させたのです。

武家屋敷、町家、道など江戸時代の地図が今も使えるのが､「坂の町杵築」です。

スポット紹介

■本丸

1 杵築城

杵築城は、三方を海と川に囲まれています。現在の天守閣は、1970（昭和45）年に建築されたものですが、内部は資料館となっており、藩主松平家の家紋（雪笹）入りの甲冑や、将軍に献上した名産豊後梅の砂糖漬けの壷、藩主の詠んだ和歌、杵築出身で山本五十六の親友であった堀悌吉の遺品などが展示されています。天守から別府湾を臨む眺望は素晴らしいものです。

杵築に城を構えたのは、14世紀末に木付頼直だといわれています。島津氏の豊後攻めには、木付統直が籠城し、守りました。木付統直は大友義統の除封に、自死しました。その後の領主は諸説があります。慶長４年（1599）には、細川忠興が入り、家臣の松井康之・有吉立行が守備していました。翌年の大友義統の旧領奪回の戦い（石垣原の戦い）には、大友軍が攻め、町も焼けたといわれています。

寛永９年（1632）細川氏の肥後転封後には、譜代大名小笠原忠知（6万石、あるいは４万石）が入りました。正保２年（1645）当時豊後高田にいた松平（能見松平）英親が37,000石（ほかに17,810石預り）の領主となり、以後10代、227年間にわたって領有しました。府内の松平氏（大給松平）と並んで豊後の２譜代大名として、諸大名の監視のため、両藩主は同時に国を明けない「御在所交代」の方式がとられていました。地名は元来「木付」でしたが、３代重休の正徳２年（1712）、将軍家宣からの朱印状に「杵築」と記されたことから、杵築に改めました。

■北台武家屋敷

2 勘定場の坂

土塀と石畳が美しい、海を見降ろせる杵築の代表的な坂です。ゆるやかな傾斜と広い石段は、馬や駕籠かきの脚に合うように配慮されています。江戸時代の坂道造りの知恵が偲ばれます。坂の下の現在の豊和銀行がある場所に、藩の諸勘定をする“勘定場”があったのでこの名がつきました。

この坂は、武士だけが通る事ができて、庶民は別の坂を通っていたそうです。坂道の幅は、箱根街道と同じ幅に作られています。上から24段目の階段に、逆さ富士と呼ばれる富士山の形をした石を見つけることができるので、一段一段探してみるのも楽しいものです。

坂を登った右手には杵築小学校があり、藩校「学習館」の門が、今も校門として使われています。

3 磯矢邸

御用屋敷（藩主の休息所）で、殿様が立ち寄ってお茶を飲むための休憩所でした。寛政12年（1800）の後、藩の御用屋敷「楽寿亭」の一部に使われましたが、文政７年（1824）に楽寿亭が廃止されるとともに武家屋敷に戻っています。

4 能見邸

杵築藩主松平家は、三河以来徳川家に仕えた譜代大名で、俗に「十八松平」といわれ、本姓は能見氏です。家老であった能見家は藩主の一族でした。その屋敷が能見邸です。

玄関の間、上段の間などの部屋があり格式の高さがうかがえる造りとなっています。

見事な欄間は「波うさぎ」。波は火避け、うさぎは子孫繁栄を表しているそうです。

最後に住んでいた能見マサ様より市に寄贈され、現在では、槍をしまう棚のある部屋等が、ゆっくりくつろげるカフェ『台の茶屋』になっています。

5 大原邸

江戸後期の上席家老の大原氏の武家屋敷で、今で言う官舎であったり、迎賓館の役目をしていた事もありました。その格式は杵築一と評されています。江戸時代最後に住んでいた大原文蔵家を屋敷名にしました。

茅葺きの堂々たる屋根・玄関に、母屋東には廻遊方式の庭園もあります。池は長寿を意味する亀に見立てた石組になっています。

虫封じのために、かまどでいぶすと天井裏にひろがって屋根の下から煙が出てくる、いぶし式の屋根構造になっています。

また、仏間の天井が一部高くなっている所は、天候の悪い日に弓を射る練習する場所：弓天井ではなかったかと言われています。

6 酢屋の坂

坂と谷町通りの角の『綾部味噌』の前身が酢屋だったことから、酢屋の坂と呼ばれていました。

戦国時代、敵が押し掛けてこないように坂の入り口を狭くし、途中から扇型に広がっていて、戦いやすいように設計されています。坂の上から見ると遠近法に

より、とても長い坂のように見えます。武家屋敷と商人町を結ぶこの坂の構造は、馬と駕籠が運送の主流でしたので、馬もたやすく、またカニ歩きで駕籠が上り降りられるように段差をとても低くしてあります。その佇まいは石畳が武家屋敷と調和してとても美しい一角をなしています。

■商人の町

7 綾部味噌

以前はお酢の店として建てられましたが、現在は味噌屋で、原料の大豆は100%国産にこだわり、工程はすべて手作業で、丹精こめて作られています。伝統的な室蓋（むろぶた）法で製麹し１年以上発酵・熟成させた手造りの天然醸造みそが販売されています。酢屋の坂に漂うお米や大豆の香りの白い湯気は、味噌屋を始めた明治33年（1900）から変らぬ風景です。

8 とまや

江戸時代中期から10代270年続くお茶屋です。建物は明治８年建築の入母屋造りの妻入りの建物です。

お店には、お茶の葉を入れていた大きな信楽焼の茶壺、お茶の葉を測っていた天秤秤（てんびんばかり）、抹茶をひいていたいた茶臼等　創業当時からの道具が残ってます。城下町散策の途中で一服されていきませんか。

■南台武家屋敷

9 志保屋の坂

谷町から南台へと続く坂で、古くから谷町の酒屋で身を立て繁盛していた豪商・塩屋長右衛門がこの坂の下で営んでいた塩屋（酒屋）の屋号から名付けられたということです。映画『男はつらいよ・花も嵐も寅次郎』にも登場しました。

10 一松邸（ひとつまつてい）

一松家には武術の免許状が多くあり、代々杵築藩で剣術の指南役などとして仕えた家柄のようです。一松定吉は小学校教師の後、大阪で検事、国会議員を経て大臣まで昇進し政界で34年活躍した人物です。一松邸は当時１千円で家が建っていた時代の昭和４年に５万円（現在では約５億円）をかけて建てました。

材料は山桜・黒柿や屋久杉を使用し、10m通しの一木梁、切込み細工、２枚で１軒家が建つと言われる欄間、雪見障子すりガラスと手吹きガラス、３部屋を開放できる柱のない客間があります。当時の粋を集め、贅の限りを尽くした材料と技術で建てられています。

現在地に移築され、城下町を見渡せ、杵築城や遠く四国を臨むことができます。

11 きつき城下町資料館

エントランスに天神祭の御所車が迎えてくれる資料館の館内には、「武士のくらしと文化」、三浦梅園、重光葵など「杵築の生んだ先人たち」をテーマに資料が展示されています。中でも１階の「坂のある城下町」をテーマにした城下町復元ジオラマは必見です。小さな城下町が武家屋敷、商人町、寺町などに分かれている事がよくわかります。そばの航空写真と比べて見ると、町並みは変わらず、江戸時代の地図がそのまま使えることがわかります。むかしの面影を残す、九州の小京都：杵築城下町にロマンを馳せる事が出来るでしょう

■寺町

戦国時代、いざという時に兵を置くためのお寺が集まった町です。殿様が通るためにそこまでの通りを広くしている所もあります。どこのお寺にもソテツを植えていて、赤い実を炒って食べたり、でんぷんを餅にして食べたりと戦の際の非常食にしていたという事です。

12 養徳寺

初代松平藩主：松平英親が1645年豊後高田から杵築に移封した時に、養徳寺は松平家の菩提寺として創建されました。この地で没した６・７代藩主が眠っています。杵築市の一大イベントである〈城下町散策とひいなめぐり〉で本堂に飾られるお雛さまは、とても人気があります。

13 正覚寺

八百屋お七が恋した侍に会いたいがために江戸の町に火をつけ、火あぶりになりました。その侍が身分を捨てて杵築の殿さまをたよりにやってきてお坊さんとなり、珍しい鉄製の仏像を造らせ死ぬまでそこでお七を弔ったという悲しい話がのこっています。

14 安住寺

臨済宗南禅寺派の寺院で、木付氏の菩提寺でした。木付頼直が製作させた「文和二年」銘の梵鐘（県有形文化財）が残っています。

このお寺に眠る伊予（愛媛県）生まれの天才芸術家：村上天心居士が寝泊まりして描いた開山堂の天井龍図や本堂の襖絵があります。彼は小学校は「行っても学ぶ事がない」とあまり行かず、青年期は各地を遊学し、芸術と文学の道を究めています。24歳の時『小楠公奮戦の図』を「帝展」に出品し、新聞に掲載されるなどして世間の注目を集めましたが、それを嫌って杵築へやってきたという事です。

15 長昌寺

松平英親が奥方の菩提樹として創設した寺院です。また、面積約1,650㎡の築山式の枯山水庭園が有名です。

トピック

武家屋敷

表門をくぐると、目隠しのソテツがあり、開門してもプライベートが守られている設計、母屋の天井は刀や槍を振り回さないように低い設計になっています。

部屋に敷かれた、へり（縁）が幅広で紋が入っている紋べり（または高麗べり）の畳は、将軍家・大奥・大名・家老等の上級武士の部屋に見られます。下級武士は黒無地で細いへりの畳、侍従はへりのない織り込んであるだけの琉球畳（七島藺（しっとうい））、それに対して庶民は床にゴザ、床にむしろ、床にわらという暮らしでした。

床の間の床柱を削った「背ずり」は座イスがわりで、そこを背もたれにして、障子を枠に見立て一枚の絵の様にして庭園を愛でる場所だったのです。

戸袋は目障りにならないように、縁側の一番端に１か所だけに作られています。長い縁側の十数枚の雨戸をすべて その１か所に収める事が出来るのは、滑車もないのに90度の角を雨戸がスライドする設計になっているからなのです。これは必見です。

うれしの（若栄屋）

元禄年間創業の300年を超える老舗料亭です。杵築藩の殿様が胡麻味噌ダレにつけた新鮮な鯛のお茶漬けを召し上がった際に「うれしいのぅ」と大変喜ばれたことから名づけられたという“うれしの”は、江戸時代から続く伝統の料理です。マンガ「美味しんぼ」単行本第71巻の第１話「日本全県味巡り大分編」に登場しました。殿様気分を味わえる一品です。

着物レンタル

和服がとてもよく似合う城下町。南杵築の武家屋敷「中根邸」内に、着物のレンタルと着付けを行う施設「和楽庵」をオープンしました。

杵築市は“和服の似合う町”をコンセプトにかかげ、2010年11月には全国初の「きものが似合う歴史的町並み」に認定されました。着物で町を散策すると武家屋敷や「きつき城下町資料館」などの入館料が無料になるサービスを実施しています。また毎月第３土曜日は「きもの感謝祭」を開催し、プロカメラマンによる無料の写真撮影とプレゼントも用意されています。

和服で、いにしえの城下町をそぞろ歩いてみたいものです。

七島藺（しっとうい）

豊後の七島藺の栽培は、1660年代に、府内の橋本五郎左衛門という商人がトカラ列島から苗を持ち帰ったことがきっかけといわれています。薩摩のゴザの材料が琉球（トカラ列島）にあることを知り、竹の杖に隠して持ち帰りました。やがて国東半島東部から別府湾周辺にかけて盛んに栽培されるようになりました。のちに藩財政立直しのための専売品になりました。この七島藺（七島莚・琉球莚（いぐさ））の生産と交易により、杵築城下はぐんぐん人口が増え、繁栄の道をたどる事になるのです。昭和11年に青莚（せいえん）神社が創建され、当時からその年に織り上がった最初の畳表がここに奉納されてきました。

日　出

ストーリー

海の城下町

“木下右衛門太夫殿の居所あり 城有 東南に海近し”
（貝原益軒）

“日出の城下に至る 此所は木下侯の御居城なり 御城小城ながら四方の堅めは有る所にてあしからず”
（古河古松軒）

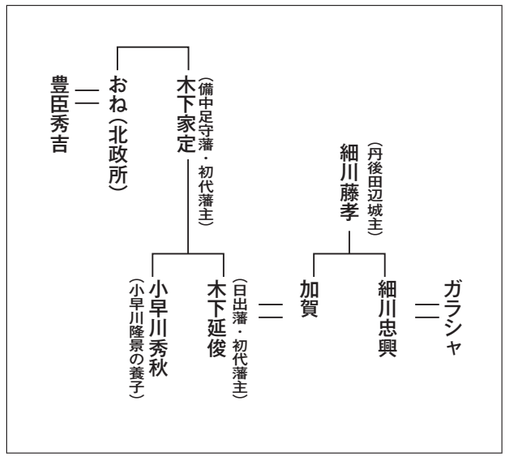
上の文章は、貝原益軒が豊後を旅して、海辺の立地を記したものです。また下の文章は、辛口の評価で有名な古河古松軒が褒めた文章です。

海の城下町、日出は中世以来の別府湾に面した古くからの港町でした。

天文20年（1551）、大友宗麟（義鎮）に面会するために鹿鳴越峠を下ってきたF・ザビエルは、ここから府内沖の浜へは海路で向かっています。

問家（本姓は井上氏）は中世以来の問屋で、豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄の役）には、従軍する兵商未分離の家でした。石垣原の合戦の折には木付城に立て籠っています。木下延俊（秀吉の正室ねねの甥）が慶長6年（1601）に入部し、以来16代にわたって支配しました。

木下氏は入部まもなく問家に「日出浦の出ふね（船）、入ふね其外とい（問）の儀申付け」「前々の如く」惣問屋をするように命じています。現在の税関のような仕事を独占していたのです。



スポット紹介

■本丸・二の丸

1 日出（暘谷）城趾

1601年初代日出藩主：木下延俊が３万石で入部し、義兄細川忠興の援助を受けて、わずか１年で日出城を完成させたと言われています。日出城は海城で、本丸の南東隅に三重の天守があり、北東は鬼門に当たるので鬼門櫓を設置していました。この日出城本丸には、二層櫓と天守閣がありました。また城主たちは鬼門封じにこだわり、城下北東の鬼門に建てられていた五角形の鬼門櫓（みはり台）が萬里図書館前に復元されています。

2 釣鐘

元禄８年（1695）、３代藩主：俊長によって造られた鐘があります。遠くまで聞こえるように鍍金を使っています。町の有志たちの力によって、戦争中の金属の供出をまぬがれ、現在では、日出城趾にある日出小学校の子どもたちが毎日朝８時に７つの願いをこめて７つ鐘をついています。テレビ等にも紹介されました。

3 人柱の碑

県下でも屈指の みごとな本丸の石垣を作るのは、とても至難の技だったそうです。裏鬼門のために、一般的に行われる人形ではなく、人柱をたてた事を悼んで作られた碑に、今もお参りに来る人が絶えません。

4 帆足萬里像

1778年、日出藩家老の三男として、三の丸に生まれました。儒学者・家老。14歳で脇蘭室の塾に入って８年間勉強しました。経済・物理・医学・天文に精通し、その学識は西欧の諸学者に比肩するものであったといいます。また西洋科学を勉強するためにオランダ語の本を独学で訳した功績が認められて、22歳の若さで藩から屋敷をもらいました。そして、藩の学校：致道館でその才を存分に発揮する事になります。55歳にして藩主に望まれて家老となり、藩財政の再建にも功績を残しました。また、教育にも力を注ぎ、米良東嶠（めらとうきょう）などの門弟を育てました。

代表的な著書に天文学の本『窮理通（きゅうりつう）』があります。また、萬里先生を讃える歌も作られています。三浦梅園・広瀬淡窓とともに“豊後の三賢”と呼ばれています。

萬里は教育にも力を注ぎ、米良東嶠などの門弟を育てました。

5 致道館（ちどうかん）

日出藩では文教・産業に尽力した３代藩主木下俊長の意志を受継ぎ、教育に熱心に取り組んでいます。13代藩主木下俊敦は学問興隆のため、帆足万里を儒官とし、家塾稽古堂で藩士の子弟教育に当たらせ、天保年間に城内に学問所を設置しました。安政5年（1858）木下俊程（としのり）は城内に学舎を建設し、後に「致道館」と称しました。この建物は、県内諸藩の藩校で唯一そのまま残るもので県有形文化財に指定されています。木造２階建ての瓦葺寄棟造りで、２階は寮として使われていました。門は切妻造りの薬医門です。ここでは、礼儀作法もきびしく指導されたようです。

■武家屋敷

6 城下カレイ中間育成槽

江戸時代から献上されていた由緒ある魚なのです。海が凪いでいる時は、海面に真水が出てるのがわかる時があります。この海水と真水にもまれ海水性・淡水性のプランクトンを食べて成長する城下カレイは、マコガレイの一種で、尾ひれがまるく、体全体もまるく、目がある方が赤みを帯びていて、真水にもまれているので泥臭さがありません。その美味は古来より知られており、江戸時代には武士しか食べることができず、将軍への献上品とされて珍重されていたそうです。

ここ中間育成槽では、5センチか6センチに成長してから、10万匹以上を放魚します。5月から7月が城下カレイの旬になります。

■城下町近郊

7 襟江亭（きんこうてい）（マップ範囲外のため位置表記していません）

江戸時代には参勤交代の船が、都合の良い風や潮を待って船出していました。寛文7年（1667）3代藩主木下俊長がそのための宿泊休憩施設を深江港に建て『襟江亭』と名づけたとされています。

すぐ前が船着場となっていて、日出城から殿様を乗せた駕籠ごと船に乗せ、正面門に横付けして直接入れるように、海の石で造られた門の石段の幅を駕籠の長さに合わせて広くしています。藩主の別宅であり、来客接待所でもありました。主屋は本瓦葺入母屋造りです。

このタイプの御茶屋は全国各地にありましたが、現存するのは唯一ここだけです。

8 魚見桜（マップ範囲外のため位置表記していません）

旧藩時代の辻間村大庄屋（つじまむらおおしょうや）城内氏の子孫の屋敷にある樹齢450年の桜の古樹です。

通常の桜より半月ばかり早く彼岸（ひがん）のころ咲くので「彼岸桜」とか、旧庄屋屋敷にあるので「庄屋桜」と呼ばれていましたが、漁師さん達はこの桜の咲き具合で魚の様子を知り、魚の獲り方、網の位置を変えるので「魚見桜」と呼ばれるようになりました。毎年3月中旬の日曜日は「魚見桜まつり」が行われます。

トピック

的山荘

福岡出身の成清博愛（ひろえ）が別邸として建築したものです。大正の初め、大分県杵築市山香町の馬上金山で金鉱を当てて得た財を、惜しむ事なく投じました。「的山」とは、鉱山を当てたいという意味です。

成清は筑後郡小川村に生まれ、慶応義塾を病気で中退した後、政治家をめざします。1年間でしたが、32歳の若さで小川村の村長になりました。

鉱山の権利を得てから、明治43年から大正まで10年間ちょっとで莫大な富を得た金山王なのです。的山荘の広大な敷地は3670坪で、建物は250坪、当時の金額で総額25万円の建築費用をかけて建てられました。

的山荘では現在、高崎山を築山、別府湾を泉水に見立てた借景の日本庭園を眺めながら、城下カレイ料理やお茶を楽しむ事ができます。

回天神社

日本の敗戦が濃くなった太平洋戦争末期の1945年、1人で操縦する魚雷艇で敵艦を撃沈する人間魚雷「回天」の特攻基地が造られ、大神突撃隊が組まれました。約700名の若者が回天の操縦訓練をしました。 同年8月12日出撃待機命令を受けましたが、15日の終戦を迎え出撃を免れました。

現在は、水雷壕、回天格納庫、実用頭部格納庫などといった幾つもの岩穴の他、回天の水漏れ等の検査をした調整場プールや士官浴場等が残っています。回天基地は全国に4ヶ所造られましたが、人間魚雷回天の特別特攻隊員の英霊を祭る回天神社が存在するのは、ここだけです。回天の1/3模型と、海中より引き上げられた九三式魚雷後部が展示されています。

瀧廉太郎像

瀧家は日出藩初代：木下延俊から、家老などの職務をつとめていました。

廉太郎の父：吉弘が、政府の役人を務めていた関係で、廉太郎は横浜、富山、東京、大分などに移り住み、大分県竹田には4年間居住していました。

東京音楽学校（現：東京芸術大学）に入学し、『荒城の月』を学校唱歌に応募して認められ、ドイツ留学することになりました。しかし、ライプチヒで病に倒れ、帰国後大分市で亡くなりました。2011年3月、大分市にあった廉太郎のお墓は子孫の願いで　ここ日出町の瀧家菩提寺である龍泉寺の瀧家のお墓に移されました。

【近代】別　府

写真提供：平野資料館

ストーリー

別府温泉は“一夜千両のお湯が湧く”と謳われ、日本一の湧出量･源泉数を誇ります。別府は明治4年（1871年）大分県によって整備された別府楠港の開港によって温泉観光地として歩み出したといえます。その頃竹瓦温泉も県によって整備されました。その後油屋熊八をはじめ別府の魅力に取りつかれた人々によって温泉観光地としての基礎が築かれました。ラクテンチや鶴見園そして地獄巡りはこうした人たちの手によるものでした。昭和初期には別府は全国最大規模の温泉観光地として大変な賑わいを見せました。

戦後になると、高度経済成長とともに温泉観光地として飛躍的に発展しました。その上第二次世界大戦の戦災を免れた別府には歴史的に貴重な近代化遺産や路地裏・共同浴場文化がたくさん残っています。

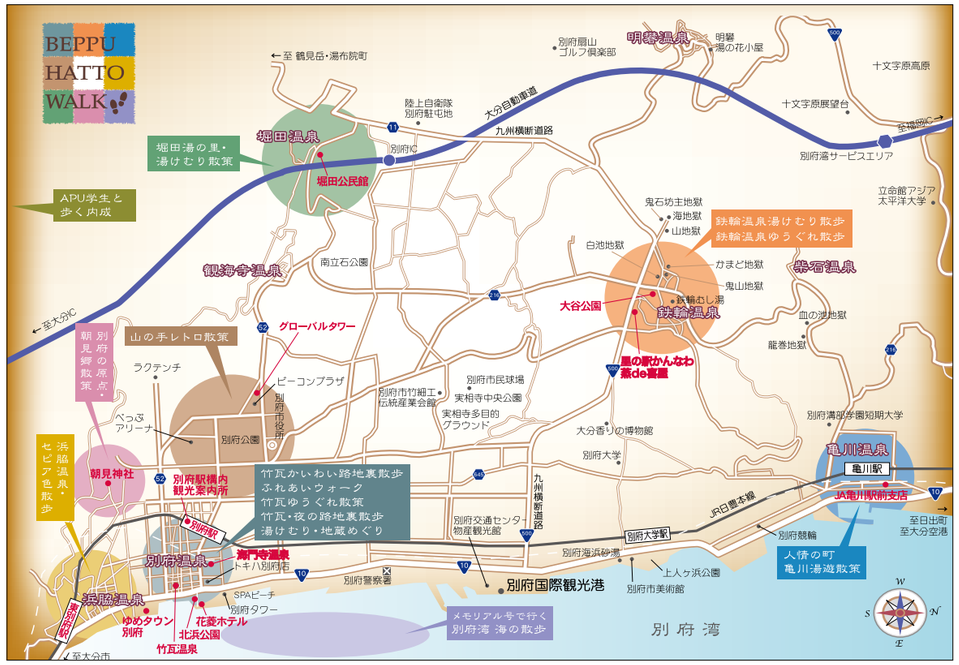
別府温泉は、別府温泉・堀田温泉・観海寺温泉・浜脇温泉・明礬温泉・鉄輪温泉・亀川温泉・柴石温泉の別府八湯と呼ばれる8つの温泉地があります。泉源は鶴見岳山系の地下に眠る“マグマだまり”によって地下水が数十年かけて温められたものです。現在およそ※2300の湯が湧き、400程の湯けむりがあがり、独特の景観を作っています。

別府温泉の礎を築いた人といえば明治39年（1906年）初代別府町長となった日名子太郎といえます。彼は朝日新聞主筆の西村天囚を招待し、別府滞在の紀行文を書かせて宣伝しました。また岡藩士であった鉄道技術者千寿吉彦に鉄輪近くの温泉付き別荘地開発を依頼しました。千寿はその泉源とするため海地獄を買い取りました。

また明治43年（1910年）、海地獄を見ていた湯治客に管理人が2銭を徴収した事から地獄見物が話題となり、その後の地獄巡りへと展開していきました。別府の観光はますます発展し、一大観光地への階段を急速に上っていきます。

そして、愛媛県宇和島生まれの油屋熊八が登場します。彼は明治44年（1911年）、妻の経営する二間しかない『亀の井旅館』にやってきました。彼の徹底したサービス精神と斬新なアイデアによって旅館は評判となり、別府は国際的な観光地へと変わっていきました。彼のアイデアは、富士山頂に“山は富士 海は瀬戸内 湯は別府”の宣伝塔を立てたり、アメリカでは飛行機から宣伝ビラを撒き、そして温泉マークを普及させたり、さらに日本初のバスガイドを発案し、菊池寛監修の案内文を七五調で読ませ「地獄めぐりツアー」を始めるなど、実に多彩なものでした。彼が聖書から引用した“旅人をねんごろにせよ”をモットーとしたおもてなしの心は別府観光に携わる多くの人が今日もなお受け継いでいます。

※平成23年3月31日　東部保健所調べ



竹瓦かいわい路地裏散歩

ストーリー

路地裏、共同湯をめぐる

明治４年（1871）、松方正義によって別府楠港が完成、２年後には別府～大阪航路が開設され、別府温泉は海から発展していきました。明治12年（1879）には竹瓦温泉が整備され、町は賑やかさを増していきました。別府市は戦災の被害を受けなかったので戦前の面影を残す場所が沢山あります。竹瓦温泉界隈は特にその面影を色濃く残す路地裏や近代化遺産が集まっています。共同湯はジモ泉（地元の温泉）と呼ばれ親しまれています。洗面器を小脇に抱えて路地裏を抜けて共同湯に通う市民の姿を多く見かけることでしょう。こうした光景は別府特有の日常風景といえます。

別府温泉には名だたる文人たちが湯治に訪れ数多くの作品を残しています。例えば、与謝野鉄幹・晶子・野口雨情は地元有力者河村徳一のサロンを訪れていました。ちなみに河村の娘丸山待子はアララギ派の歌人であった夫と死別後、時の文部大臣に求婚されましたが、ふたりの夫には仕えないと断った“最後の大和撫子”と報道されました。竹久夢二は結核療養中の最愛の恋人彦乃を看病するため老舗の「日名子旅館」に逗留し、その様子を『彦乃日記』に著わしています。また、『夫婦善哉』の作者である織田作之助は流川通りをこよなく愛したと言われています。

竹瓦かいわいの まちあるきガイドは朝・夕・夜の他に月１回の障がい者対象のコースがあり、観光客の間でも人気となっています。夜のコースでは別府の人気者“流しのはっちゃん・ぶんちゃん”の個性的なキャラクターに出会えます。

写真提供：平野資料館

スポット紹介

1 波止場神社

明治３年（1870）松方正義が別府の発展と航海の安全を祈念して創建された神社です。長年旧別府楠港の繁栄を見守り続けてきました。建物内の格天井には駐春園主人嶋石生の手になる花鳥、十二支が描かれていて、今も色鮮やかに残されています。

2 竹瓦温泉

明治12年（1879）に造られました。当初のものは竹屋根葺きで、その後瓦葺きに改築されたことから、この名が付いたと伝えられています。現在の建物は昭和13年（1928）に建て替えられたもので、唐破風建築（神殿造り）で、別府温泉のシンボルとして親しまれています。現在は砂湯も楽しめます。平成16年（2004）国の登録有形文化財になりました。

3 竹瓦小路

ここのアーケードは大正10年（1921）に造られたもので、現存する日本最古のアーケードです。木造に透明ガラス張りという造りは当時とてもハイカラなものでした。平成21年、日本の近代化歴史産業遺産に指定されました。

4 寿温泉

明治23年創業、今では改装されてはいますが、アールデコ風の面影が残されている洒落た洋風の温泉です。当時は床下の湯、子宝の湯と呼ばれ、泉質は重炭酸土類泉です。

5 中浜地蔵尊

「水の神様」です。文禄５年（1596）の大地震で別府湾に浮かぶ瓜生島が沈み、多数の犠牲者が出たといわれています。その犠牲者の霊と今後の平穏を願い建てられました。この拝殿の後ろには、一つだけ願いを必ず叶えてくれると言う言い伝えがあり、今でもたくさんの人がお参りしています。

6 後理髪店（うしろ）　住宅地図発祥の地

戦後間もない昭和23年（1948）、この店の２階６畳２間で住宅地図を作り始めた善隣出版社が現在の『ゼンリン』のスタートでした。別府の町を一軒一軒足で調査して作成した観光地図からはじまり、今では全国の住宅地図を作成しています。この住宅地図が事件解決へとつながり、東京警視庁の全パトカーに住宅地図が配備され話題を集めました。現在はカーナビの開発も手掛け、世界に進出する上場企業に発展しています。

7 紙屋温泉

明治初期からの名湯です。“ゆかしさに誰しも汲んで飲みやろうぞ 小春わすれぬ紙屋おんせん”（寒心斎）と詠まれるほど、特に飲用は効能があり、胃腸病や前立腺に効果があります。

8 長寿味噌・坂本長平商店

創業明治43年（1910）から手作りを守っている老舗のお味噌屋さんです。

9 アホロートル

かつては時間制の貸席『すず屋』でした。建物内部には、隠し階段と隠し部屋もあります。現在は軽食喫茶として営業しています。“アホロートル”とはきれいな水にしか棲めない両生類のウーパールーパーのことです。

10 松下金物店

明治時代の建築で、現在の外装は旧帝国ホテルと同じスクラッチタイルを使用しています。東京で流行した看板建築の３階建てで、内部には昔ながらのホーロー看板も展示されており、温泉、荷物用エレベーターもあります。

11 梅園温泉

看板がなければ全く気付かないような細い路地の奥にあります。大正５年（1916）創業。地元の「ジモ泉」と呼ばれる共同温泉で入浴料は100円です。

12 国際民宿こかげ

1940年（昭和25年）創業の外国人旅行客をお迎えする国際民宿です。レトロなインテリアに飾られた館内はタイムスリップしそうな不思議な空間です。

13 駅前高等温泉

大正13年（1924）に建てられた非常に珍しい洋風建築の共同浴場です。ドイツなどで見られるレンガや石をつめたハーフティンバー様式で、２階では宿泊もできます。温泉は２つの源泉があり、あつ湯･ぬる湯の２種類の温泉に入浴できます。

14 べっぷ駅市場

昭和41年（1966）の大分国体開催に合わせて別府駅の南隣の高架下に建設され、商店が立ち並ぶ市場が誕生しました。山盛りのおそうざい、お寿司、B級グルメ等何でも揃う別府市民の台所として親しまれています。

15 栄屋

かつては別府の町には20軒以上のアイスキャンデー屋さんがあったそうですが、今はこちらの１軒を残すのみとなってしまいました。当店は創業60年以上の歴史を誇り、いろいろな味のアイスキャンデーがあり、昔ながらの懐かしい冷たさを楽しむ事ができます。

山の手レトロ散策

ストーリー

近代化遺産をめぐる

別府駅西口周辺の山の手エリアは、大正から昭和初期にかけて別荘地開発が進み“九州の軽井沢”と呼ばれるほどでした。この開発によって高級で瀟洒な別荘が立ち並びました。このような別荘地開発は今日の別府市街地形成に大きな影響を与えました。

この別荘地には九州の炭鉱開発で財をなした人や、関西・四国・広島の資産家、満州で一旗あげた人々が大正から昭和初期にかけて次々と別荘を建てました。この時期軽井沢や箱根でも別荘開発画が進みました。

これら別荘の多くは、皇室の方々をもてなしたり外国の豪華客船が停泊した際には歓迎パーティーが開かれるなど迎賓館の役目も果たしました。こうして生まれた別荘文化は多くの歌人・ピアニストといった芸術家を育てていきました。

また、大阪商船によって別府航路が開かれると、新興財閥が別府温泉に投資を始めました。そして公共施設や学術施設、伝統建築などの近代建築が相次いで建築されたのです。

赤銅御殿

旧別府市公会堂

スポット紹介

1 野口病院

大正11年（1922）当時の炭鉱王佐藤慶太郎によって、自身が見込んだ医師野口雄三郎のために建てられたバセドウ病専門の病院です。その名声は全国に広がり、日本全国から患者さんが来院しています。また、この管理棟は登録有形文化財になっています。佐藤慶太郎は東京・上野の美術館を寄贈したことでも有名です。

木造２階建のヨーロッパ風建築は、現在も管理棟として使われています。シックな赤いとんがり屋根をもつ玄関部分を中心に、両翼に半切妻洋瓦葺の屋根をもち、内部は天井も高くゆったりした明るい設計になっています。

2 田の湯温泉

明治末にできた温泉で、当時田んぼに囲まれ畦道を通らなければならなかったことから「あぜなしの湯」と呼ばれていました。お湯はナトリウム･マグネシウム･カルシウム－炭酸水素塩泉で炭酸水素の含有量が非常に多く、無色透明、無味無臭です。

3 別府中央公民館（旧別府市公会堂）

昭和３年（1928）、麻生太郎元首相の曽祖父麻生太吉が別府に寄付した土地に建てられました。

設計したのは東京・大阪の両中央郵便局も設計した逓信省（現総務省）の建築設計技師吉田鉄郎でした。この建物は彼が心のふるさととしたスウェーデン･ストックホルム市庁舎をモチーフとして、当時の最先端技術を駆使して創り上げたといわれています。

正面玄関は２階に位置し、大食堂、ビリヤード場、温泉までありました。ステージは声が通るような公会堂形式で、エアコンのない時代、送風機で風を取り入れ、客席に扇風機で送っていました。また、料理を運ぶエレベーターまで設置されていました。今日でも壁やドアには吉田好みに施されたステンドグラスや星型、アーチが残されており、それらを探してみるのも楽しいでしょう。

4 九日天温泉

玄関先の赤い丸型ポストがトレードマークです。明治45年（1912）から昭和40年（1965）まで陸軍病院が使用していました。お湯はナトリウム･カルシウム･マグネシウム－炭酸水素塩泉で、やや黄色かかった色をしています。

5 聴潮閣

昭和４年（1929）、浜脇高等温泉を開発し、別府市商工会議所の初代会頭を務めた高橋欽哉が、住居兼迎賓館として浜脇に建てた高級近代建築です。

間口２間の立派な式台玄関をくぐると、主屋の外観は木造２階建入母屋造桟瓦葺きの近代和風建築ですが、内部は大理石の暖炉、ステンドグラスの窓などアールデコ調のインテリアで飾られた洋風応接間を備えた和洋折衷となっています。格子状の芝を植えた前庭と秋の紅葉があでやかな中庭は見事です。また、浴室のステンドグラスは、大正時代に日本初のステンドグラス作家として活躍した小川三知の作品で、魚をモチーフにした繊細で日本画的な作品です。

平成元年（1989）に青山町べっぷアリーナ前に移築され、平成13年（2002）に国の登録有形文化財になりました。

現在では見学施設及び喫茶室として使われています。

6 京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設

大正13年（1924）、一般物理学研究および火山、地熱、温泉に関する研究と教育を目的として建てられました。設計は京都大学営繕課長永瀬狂三の手によるもので、赤レンガ造りの外観が目を引きます。Ｌ字型の建物ですが正面ファサードは玄関を中心に左右対称の造りになっています。建物の上には塔をのせ、柱型と窓、煉瓦の赤と石貼りの白との対照や、ギリシャのイオニア式の柱頭を持つ気品ある外観は今日では別府のシンボル的な建物の一つとなっています。平成９年（1998）国の登録有形文化財になりました。

■三つの高級別荘跡

A 赤銅御殿跡

筑豊の炭鉱王伊藤伝右衛門が歌人柳原白蓮を妻として迎えるために建てた別荘です。この結婚は“黄金結婚”と称され大変な話題となりました。そして多くの文化人が集うサロンとして利用されました。しかし、この別荘は百連が宮崎龍介と出会い東京で失踪し、夫伝右衛門への離縁状が新聞に掲載されるという“白蓮事件”の舞台ともなりました。

B 麻生別荘跡

旧麻生別荘は紅紫迎賓館と呼ばれ、飯塚の炭坑王麻生太吉氏（麻生元首相の曽祖父）の別邸として建てられました。取り壊された建物は昭和２年（1927）に再建されたもので、入母屋造り桟瓦葺平家建の建物は、中央に主玄関をとり左右に公私の空間がありました。床の間付きの応接室と書院造のお座敷があり、別棟には京都仁和寺庭園の茶亭飛濤亭を写した貴族好みの御茶室がありました。

C 和田別荘跡

大正９年（1920）、富士紡績創業者の和田豊治氏の別荘「致楽荘」として建てられました。この別荘は軽井沢で旧華族や財界人の別荘を数多く手がけた「亜米利加屋」により建設されました。

昭和13年（1938）中山製鋼所を興した中山悦治氏に所有権が移り、平屋の和風住宅とスペイン瓦・ハーフティンバーの特徴ある二階建洋館にリニューアルされました。取り壊されるまでは「旧中山別荘」として親しまれていました。

鉄輪ゆけむり散歩

ストーリー

今でも残る湯治宿、共同湯をめぐる

鉄輪温泉は湯けむりが無数に立ちのぼる、これぞ“湯の里”と言うべき景観が残っています。ここには今でも貸間と呼ばれる湯治宿が沢山残っており、昔ながらの面影を感じることができます。

また、この地は別府観光の原点ともいうべき地獄めぐりの中心であり、多くの観光客や湯治客で賑わっています。海地獄、血の池地獄、白池地獄、龍巻地獄は、平成21年（2009）に、『別府の地獄』として国の名勝に指定されています。

鉄輪温泉の歴史は鎌倉時代の1276年、一遍上人が念仏行脚の道中として伊予の国（四国・愛媛県）から別府に上陸しこの鉄輪にやってきたことから始まりました。

その頃、鉄輪一帯の住民は、漏れ出る熱湯や噴気が荒れ狂う地獄に困っていました。一遍上人は別府の西にそびえる鶴見岳の麓の鶴見権現で21日間「断食祈願」を行い、大小の石に経文を一文字ずつ書いて地獄に投げ込み、荒れ狂う地獄を鎮めたといわれています。その後、一遍上人は蒸し湯、渋の湯、熱の湯などを作ったと伝えられ、今日の鉄輪温泉の礎を築いたといわれています。

近代の面影を感じることができる鉄輪の湯治宿は、最近では“滞在型湯治場リゾート”として、外国人から人気のエリアになっています。

スポット紹介

1 鉄輪むし湯

石菖（せきしょう）を用いた言わば和風サウナともいうべき施設です。１メートル四方の木戸を開けて中に入ると、約８畳ほどの石室があり、温泉で熱せられた石菖（せきしょう）の上に横たわります。

日ごろの疲れも取れ、鎮静効果や喉にも効き目があるといわれ、汗を流せる温泉浴槽もあります。Ｔシャツ短パンを持参するか、レンタル浴衣で入浴できます。「豊後鉄輪、むし湯の帰り、肌に石菖の香が残る」と 詩人の野口雨情が詠っています。

2 一遍上人像

鎌倉時代、庶民を苦しめた多くの地獄を鎮めた一遍上人が、最後に残った地獄で蒸し湯をつくったとされる場所に座しています。自分の癒したい場所と同じ所にお湯をかけると良くなるといわれています。

3 渋の湯

鉄輪温泉は還元系のお湯で、お肌もツヤツヤになるので女性の方に特にオススメです。また、ミネラルがたくさん含まれています。例えば、別府市中の温泉にはおよそ400mg含まれているといわれていますが、鉄輪の温泉にはその10倍も含んでいるとさえ言われています。

渋の湯の裏手には打たせ湯の跡があります。かつて農家の人たちが田植えが終わった後の“泥よこい”として、田植えの疲れを落としに来ていました。

4 湯治を楽しめる旅館

温泉と地獄蒸し料理が楽しめる貸間旅館がたくさんあります。地獄蒸しとは、湧き出る温泉の蒸気を使って食べ物を蒸す料理法を指します。ここでは海鮮地獄蒸し料理の夕食付の宿泊プランや別に自分流に地獄釜が利用できます。

鉄輪温泉にはこの旅館の他にも地元の人たちが共同で使っている地獄釜や、湯治客が利用できる地獄釜を持っている旅館もあります。また食材を持ち込んで地獄蒸しを体験することもできます。大黒屋・サカエ家・陽光荘・双葉荘など。

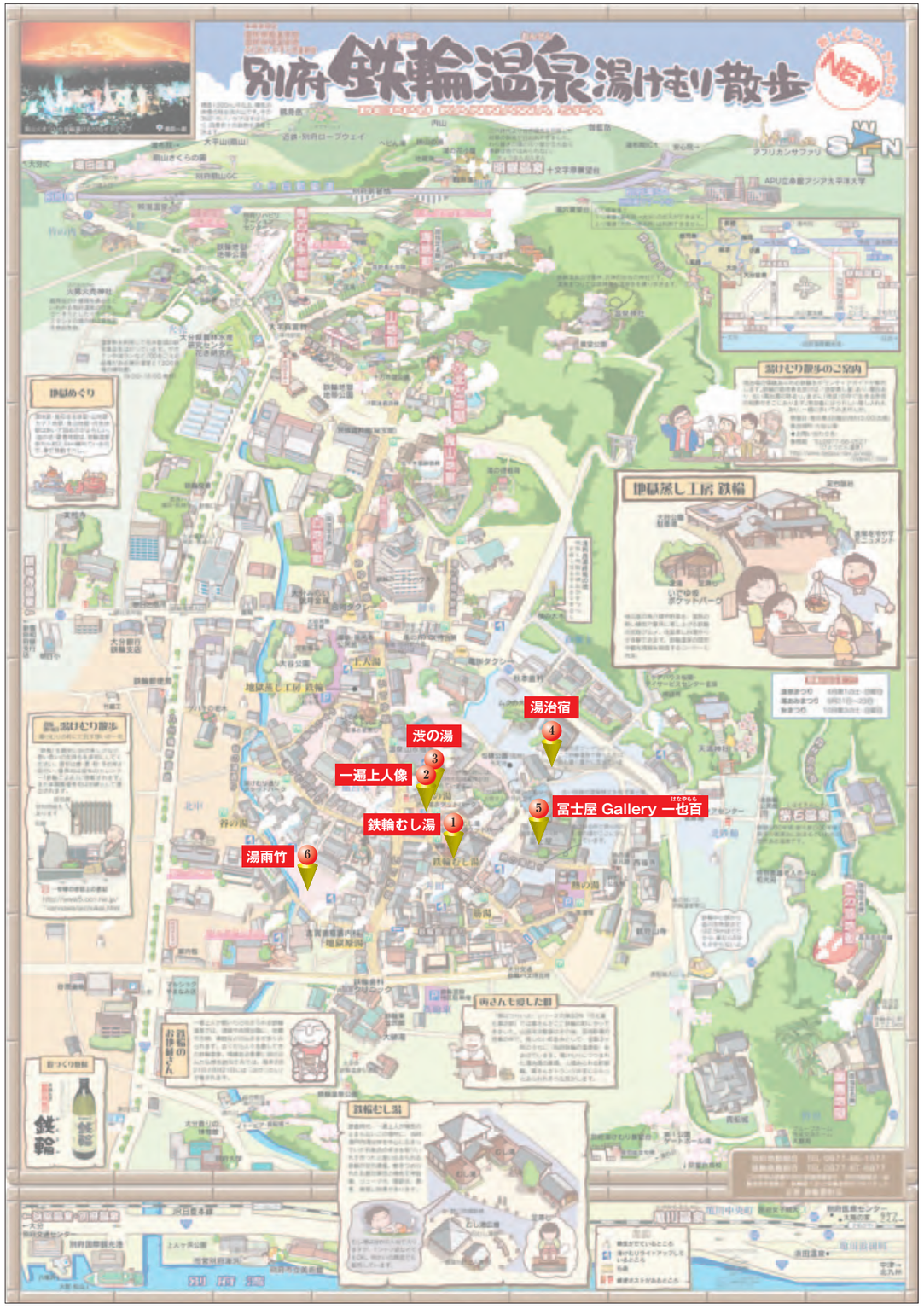
5 冨士屋 Gallery 一也百（はなやもも）

明治31（1898）に開業した冨士屋旅館は、当時新聞社の主催による大分県内の旅館人気投票で一番になった旅館です。福岡方面からの湯治客が多かった鉄輪にあって、筑豊の炭坑王伊藤伝右衛門や麻生太吉が常宿としていた格式高い旅館です。

正面に入母屋造りの式台付玄関が左右に客室を振り分け、客室は各室とも次の間付の本格的な書院造りで、床板や床柱、天井板等に銘木を使っています。東側にはそれぞれ縁側を設け別府湾の雄大な眺望を楽しむことができたそうです。

6 竹製温泉冷却装置・湯雨竹（ゆめたけ）

温度が100℃近くある鉄輪の源泉を47℃程度まで冷まさすために考え出された装置です。竹筧（たけぼうき）を重ねたような構造になっており、温泉を上から流して、竹の枝々に分かれて熱を放出させることで、水を足したりせずに源泉のままで利用できるというわけです。これは、播州赤穂の竹の枝を重ねた上から海水を流して塩を生成する方法（技条架）と同じ方式を取っています。



【近代】豊後高田市

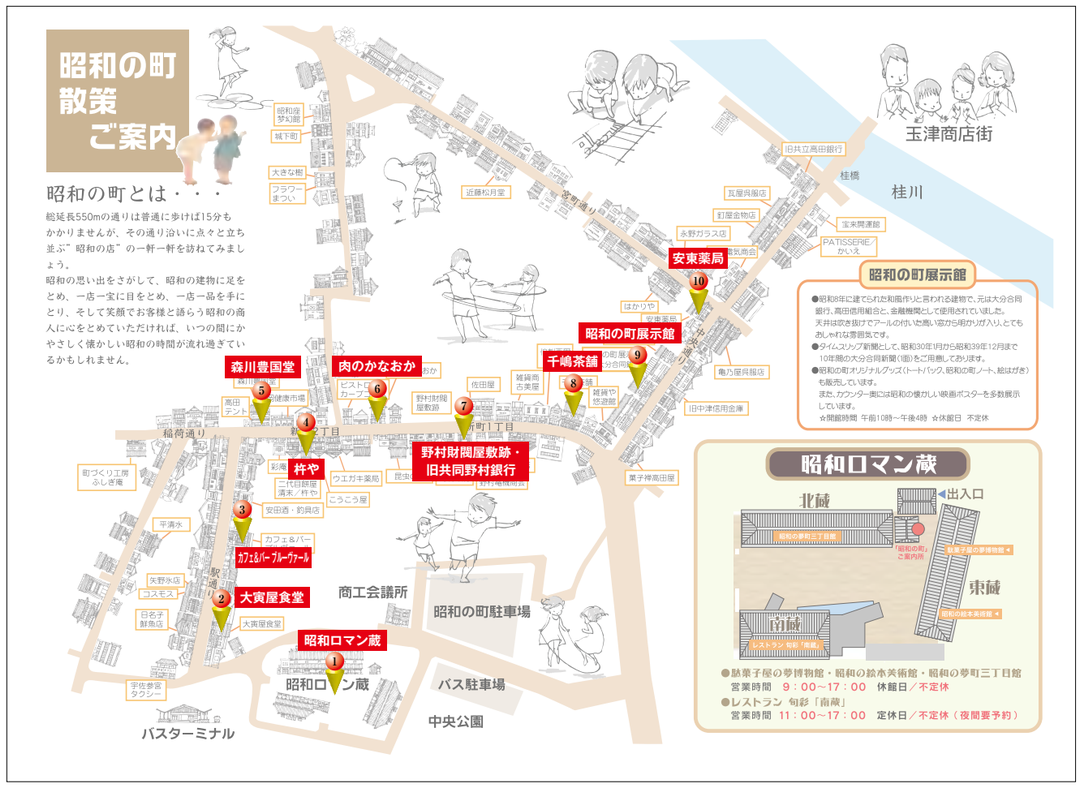
ストーリー

豊後高田市は国東半島の西に位置し、江戸時代から交通の要衝・農産物の集積地として国東半島一の賑やかな町として栄えました。しかし、社会環境の変化によって昭和30年代以降賑わいは失われ「地元の人に見捨てられ、犬猫しか通らない商店街」と言われるようになりました。

その後市は街の再生を図りましたが中々進展しませんでした。しかし地元の人々の間で地域のお宝に注目したアイデアが少しずつ出てきました。そのアイデアは「昭和30年代」というキーワードに集約され、平成13年（2001）『昭和の町』がオープンしました。　どこか懐かしく癒やされる商店街『昭和の町』がここに誕生しました。個性を生かす町づくりを始めようという構想から9年後のことでした。当初は9軒の商店での出発でしたが、現在では昭和の建物、一店一宝、一店一品、昭和の商人の4要素を満たした約40店が「昭和の店」へと生まれ変わっていきました。

こうして町並み整備や観光客への「おもてなし」を工夫したところ、年間33万人が訪れるまでになったのです。

スポット紹介



1 昭和ロマン蔵

この蔵は、昭和12年（1927）、明治から昭和にかけて大分県きっての富豪といわれた野村財閥によって建てられたもので、小作米を入れる倉庫でした。野村家は当時360町歩の水田を持ち、1万俵余りの小作米が納められたといわれています。現在でも北蔵はJAの米貯蔵庫として使われています。

昭和の町を運営する地元は、平成14年（2002）、この米蔵を『昭和ロマン蔵』として『駄菓子屋の夢博物館』を開業しました。そして、平成18年（2006）に旬彩南蔵、平成19年（2007）には昭和の夢町3丁目館を次々とオープンさせ昭和の香りやお宝を詰めこんだ施設造りました。

『駄菓子屋の夢博物館』の駄菓子屋の奥には、江戸から昭和50年代のおもちゃコレクションゾーンがあります。館長の小宮裕宣（こみやひろのぶ）氏が30数年かけて集めた25万点の中から日本一の数を誇る6万点が展示されています。

『昭和の町3丁目館』の豊後高田の土産店の奥には、昭和30年代の民家と空き地を再現した民家ゾーンがあります。1時間2500円でレンタルできる黒板つきの教室もあります。

『昭和の絵本美術館』では、昭和の町のキャラクターデザインを手がけている長崎・平戸出身：黒崎義介（よしすけ）氏をはじめとする童話絵本の展示をしています。

『旬彩南蔵（しゅんさいみなみぐら）』は、国東半島の「山」「里」「海」の旬の食材を使った本格和食レストランです。

2 大寅屋食堂

この食堂は昭和40年（1965）まで走っていた鉄道の駅前に昭和3年（1928）に創業した老舗です。店内20席ほどの店構えは昭和そのものの食堂です。現在は3代目ということですが、昭和55年から値上げをしていないメニューに驚きます。焼き飯350円、かけうどん200円など嬉しいメニューがあります。

創　　業／昭和３年
建　　築／昭和 52 年
一店一宝／大衆食堂の出前自転車
一店一品／昭和値段のちゃんぽん、高菜焼き

3 カフェ&バー ブルーヴァール

内装にこだわったカフェで、昔ながらの給食メニュー全16種類を食べることができます。

鯨カツ、揚げパンやナポリタン、鯵のフライなどがあの銀色のアルミのお皿に入って出てきます。ミルメークや脱脂粉乳などもあります。店先にはその場で栓を抜いて飲むびんジュースの自販機もあります。

創　　業／平成７年
建　　築／昭和49年
一店一宝／昭和の夜のウィスキーボトル
一店一品／昭和なつかしの学校給食

4 杵や

昭和の町の開業とともに2代目が戻ってきて餅屋を開きました。この店は昭和38年から61年まで先代の手によって餅つきをしていました。2代目主人もそれを受け継ぎ、毎朝つきたての餅で作った豆大福や、ピーナッツ餅などを販売しています。展示されている大きな餅つき機は実際に使える機械に再生しました。日本初の餅専用醤油も発売中です。

創　　業／昭和38年
建　　築／昭和25年
一店一宝／初代手馴れの餅つき機
一店一品／2代目自信のつき立てピーナッツ餅

5 森川豊国堂

このお店には「アイスキャンデー 10円、5円、ミルクセーキ35円」と書かれた昭和37年（1962）当時の価格表があります。"チリンチリン"と鐘の音を鳴らしながら自転車で売り歩いていた昔ながらのアイスキャンデー、食べるミルクセーキを販売しています。このミルクセーキですが、すぐ食べるならソフトクリーム型、町を歩いた後車の中で食べるならカップがおすすめです。

また、ミルクセーキやアイスキャンデーを入れて出前をしていた木製の岡持ちも飾ってあり、昭和の甘い香りに包まれます。

創　　業／大正８年
建　　築／大正８年
一店一宝／アイスキャンデーの行商自転車、和菓子の配達自転車
一店一品／とら巻きとふくべぇ、夏はアイスキャンデー、ミルクセーキ

6 肉のかなおか

昭和26年（1951）創業のお肉屋さんです。甘く懐かしい味がする「コロッケ」は、初代おかみさんが家族のおかずに作っていたものだそうです。

このお店実は屋根を外したら創業時そのままの手すりが出てきたので、その雰囲気を生かして銅板の看板に付け替えたり、ネオンサインを入れたりして店構えを作りました。手回しの肉切り機にはこの機械を実際に使用した初代・愛次郎によれば、「当時の肉切りは苦労の連続だった」と書かれていたそうです。へたをすると手を切り落とす危険があったという、苦労がしのばれるお宝です。おからコロッケ・和牛上コロッケなど昔ながらの味で、週末には1000個ぐらい売れる人気商品です。

創　　業／昭和26年
建　　築／昭和26年
一店一宝／初代手回しの肉切り機
一店一品／おかみ相伝の手作りコロッケ

7 野村財閥屋敷跡・旧共同野村銀行

”野村財閥”は、かつて豊後高田の商店街の中心に豪壮な屋敷を構えていました。

昭和8年（1933）屋敷の前に金庫代わりにと銀行を建てました。現在昔のお金やその資料を多数展示しています。その当時ではありえないような大きな金庫室の扉の中では、1億円の重さを体験できるコーナーもあります。この場所は平成5年（1993）までは西日本銀行が営業していました。

8 千嶋茶舗

大正11年（1922）創業当時の看板をそのまま掲げている昔ながらのお茶屋さんです。大正5年（1916）から昭和40年（1965）まで軽便鉄道が通っていたころ、1つの貨車を貸し切って1年分の宇治茶を京都宇治から運んだという大きな茶箱と茶筒がお宝です。

創　　業／大正11年
建　　築／大正時代
一店一宝／貨車借り切りの特大茶箱
一店一品／茶袋も昭和の玄米茶

9 昭和の町展示館

昭和19年（1944）築の展示館では、昔の映画ポスターやお菓子メーカーの看板が展示されています。また、ここでは絵葉書やうちわ、昭和の町が描かれたノートなど昭和の町オリジナルのグッズが購入できます。中でも珍しいのが昭和30年代の大分合同新聞一面のコピーが、オリジナルケースに入っている商品で、昭和にタイムスリップできる空間です。

10 安東薬局

ここは以前は旅館でしたが、現在は昭和の町第1号館となっています。店内も昭和の時代そのままに残っています。室内電気の線も天井に隠さず全部表に出ています。

2代目の考案した自分の名前を付けたインフルエンザの漢方薬が、とてもよく効いたといいます。「越中富山の入れ薬の柳ごうり」や「昭和思い出の珍品たばこ」（若葉、しんせい、ゴールデンバット）などが飾られていて、たばこは購入する事ができます。

創　　業／明治35年
建　　築／昭和初年
一店一宝／漢方薬の薬研と薬袋、入れ薬の行商柳ごおり
一店一品／家伝漢方の煎じ薬、越中富山の入れ薬、いまだに買える昭和のたばこ

トピック

ボンネットバス

ボンネットバスは市内の観光スポットの周遊を視野に入れて市が購入し、広島県にある福山自動車時計博物館で修復が行われました。この昭和30年代の27人乗りボンネットバスは、エンジン音も結構な音で、ハンドルも重たく、ウィンカーはなんと手動です。車内では、紺色の“制服”に身を包んだバスガイドの「発車オーライ」と大分弁の流暢なガイドで、約15分間の時間旅行を楽しむ事ができます。

ボンネットバスは土、日曜や祝日には無料で運行しています。昭和の町周遊コース（予約不要）や六郷満山周遊コース（4日前までに要予約）があります。懐かしのボンネットバスに乗って昭和の気分をたっぷり満喫することができます。

仏像の見方

仏教の誕生

古代インド釈迦族の王子ゴータマ・シッダールタ＝お釈迦様は人々を救いたいと29歳の時に出家し、6年の苦行の末、悟りの境地に達しました。これが仏教の誕生です。そして、その仏教が538年に日本に伝わったと言われています。

仏足石

仏像の起源

国東半島に多く残る仏像や磨崖仏も仁聞菩薩の作であると伝えられるものが多く、6万9千体の仏像を造ったとされています。

お釈迦様が80年の生涯を閉じた（入滅（にゅうめつ））後、まだ仏像は造られてなく、足形を刻んだ仏足石や遺骨を納めた仏塔などを拝んでいました。お釈迦様が入滅した500年後の1世紀後半から2世紀頃から、その姿を表した繊細で流麗さを持つ仏像がインド北方のガンダーラで造られるようになりました。

そして、シルクロードを経由して中国・朝鮮半島を経て、仏教とともに6世紀中頃に日本に入ってきました。日本で本格的に仏像が造られるようになるのは、7世紀に入ってからになります。

真木大堂

五百羅漢

両子寺の護摩堂

仏像の変遷

	＜仏像の材質・技法＞	＜主な仏師＞
7世紀～	金銅仏… 銅で鋳造した仏像に金メッキをほどこしたもの	**鞍作止利（くらつくりのとり）** ⇒日本最初の仏像製作者
8世紀	塑造・乾漆造… 木心に粘土を盛りつけてつくったもの・塑像の上に麻布と漆を貼り重ねて中の土を抜き、木枠をはめたもの	**国中連公麻呂（くになかのむらじきみまろ）** ⇒東大寺大仏鋳造の指導者
9世紀～ 10世紀	木彫仏の一木造…頭･体を1本の樟･カヤ･桜･桧などで彫ったもの（中には内刻りをほどこしたものもある）	**会理（えり）** ⇒京都東寺の僧兼仏師
11世紀	寄木造… 数本の木材を寄せ合わせて彫ったもの	**定朝（じょうちょう）** ⇒寄木造による和様を完成、巨大な仏像を製作
12世紀末～ 13世紀	寄木造で目には玉眼をはめ、髪は高く結いあげ、 衣文のひだは写実的	**運慶・快慶** ⇒写実的で動きのある仏像を製作

仏像の種類とその役割

仏教の礼拝の対象である仏像には、その役割によって大きく分けて如来・菩薩・明王・天部の４つの種類があります。

如来

“悟りに達した者”という意味で、仏教の創始者である釈迦の姿が基本になります。

俗世間を離れたことを示して、大きな光背を背に蓮の花：蓮華座に座り、あるいは直立しています。頭は頭頂部が盛り上がり（肉髻）、髪は突起の一粒一粒に螺旋を施した螺髪に表します。眉間には丸い白毫があり、人々を救う時にその毛が伸びて光を放つと言われます。持物は持っていないのが普通ですが、薬師如来だけは左手に薬壷を持っています。

富貴寺木造阿弥陀如来坐像

装身具を一切身に付けず、単衣の衣をまとっていますが、大日如来だけは例外で、装身具をつけて着飾っています。

菩薩

“悟りを求める者”という意味で、菩提薩埵を略した呼び方です。

古代インドの貴族の姿に基づいて、頭に髻を結い上げて、冠をのせ、両肩から天衣を垂らし、下半身に裳をまとります。瓔珞、腕釧、臂釧、足釧などの豪華な装身具を身に付け、手に持物を持っています。地蔵菩薩だけは頭を丸めて宝冠もつけず、僧の姿で表わされています。

光明寺木造聖観音立像

明王

仏の教えに従わない衆生を力で服従させ、教え導く役割をもった仏様です。

「明」は仏の真理の言葉で、これを唱える事により罪業や煩悩を消すことができると信じられ、絶大な力を持つ仏様です。明王が大日如来の命を受けたとも、如来が自ら明王に変化したともいわれています。

地蔵院不動三尊像

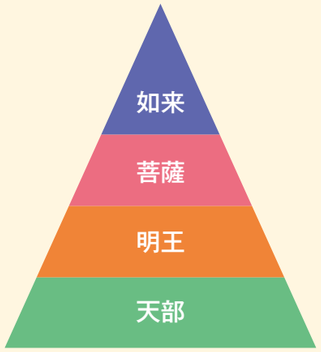
炎の光背があり、荒々しい岩の上に立ち、あるいは座っているものが多く、恐ろしい忿怒の形相をしています。

天部

釈迦およびその教えを守護する役割をする仏様です。

いろいろな物を手に持ち、靴をはいています。中国の貴婦人や官人のような姿の貴顕天部と、鎧や甲をつけて武器をもった武人天部とがあります。

西明寺毘沙門天立像



＜国東半島のおもな仏像＞

如来

富貴寺・真木大堂の阿弥陀如来像（豊後高田市）、胎蔵寺の大日如来像（国東市）、無動寺（豊後高田市）・岩戸寺（国東市）の薬師如来像など。

菩薩

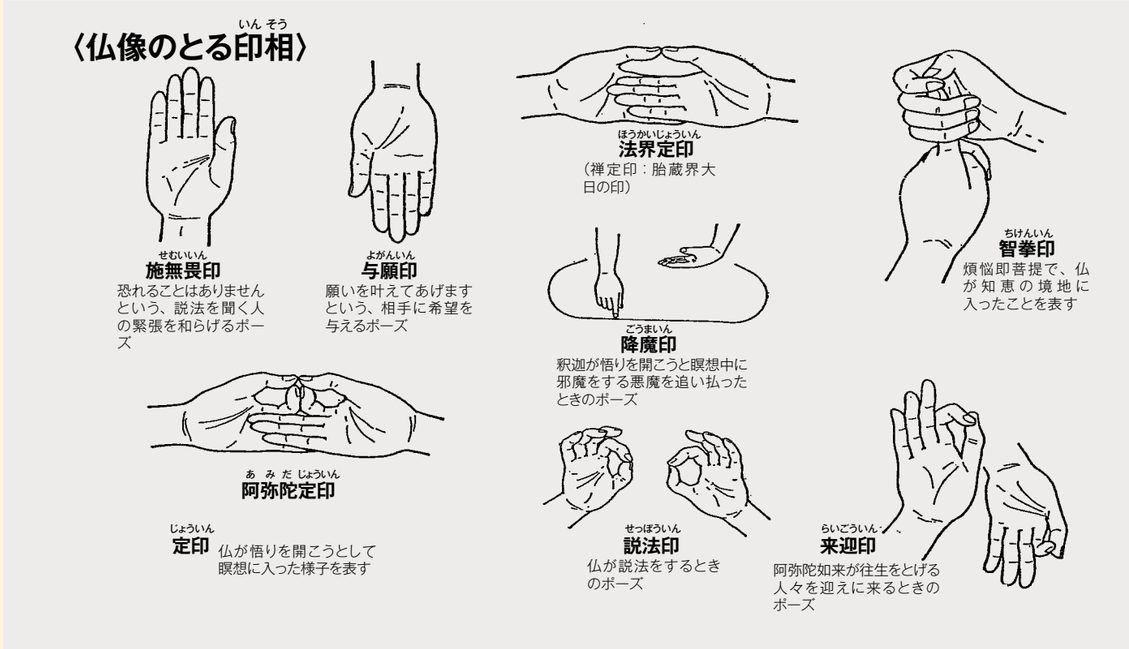
両子寺・報恩寺の千手観音菩薩像（国東市）、弥勒寺の弥勒菩薩像（豊後高田市）など。

明王

成仏寺の不動明王像（国東市）、真木大堂の不動明王像・大威徳明王像（豊後高田市）など。

天部

天念寺の吉祥天像（豊後高田市）、真木大堂の四天王像（豊後高田市）、西明寺の毘沙門天像（杵築市）など。



磨崖仏

大分県は磨崖仏の数が80数か所と日本一です。その内の約半数が県の北部、特に国東半島にあります。古代からの現世利益の仏である薬師如来や観音菩薩に加えて、平安時代以降に浸透した天台山岳仏教を反映して不動明王などの密教系の像や阿弥陀如来・阿弥陀三尊などの浄土信仰の像が多いのが特徴です。また鎌倉時代以降の中世には地蔵菩薩や十王像が盛んに造立されました。

県の中・南部の磨崖仏は阿蘇火山灰の堆積層である溶結凝灰岩のやわらかい岩肌に刻まれ、木彫仏に近いシャープな彫りのものが多いのに対し、県北部の磨崖仏は大粒の安山岩の礫を多く含み、硬さが不均質な凝灰角礫岩に刻まれ、薄肉彫りからせいぜい半肉彫りで省略的なものが多くなっています。

造立の時期は、熊野磨崖仏が県北にあって唯一平安時代の作で、それ以外は鎌倉時代以降の造立です。

国東半島の主な磨崖仏…

熊野磨崖仏（豊後高田市）、川中不動磨崖仏（豊後高田市）、元宮磨崖仏（豊後高田市）

熊野磨崖仏

国東塔

国東半島独特の仏塔（宝塔）で、下から基壇・基礎・台座（蓮華座）塔身・笠・相輪となっています。相輪の宝殊が火焔付きになっていて、塔の中心となる塔身には、造立の目的（納経・供養・逆修・墓標など）や年月日・願主名などの銘文が刻ざまれている場合があり、中には経典（法華経）や仏舎利などを納めていたと言われています。岩戸寺の国東塔（国東市）を最古（1283年）に、鎌倉時代から南北朝・室町時代・江戸時代と各時代にわたって造られています。また制作者である僧籍を持つ石大工の名が銘文に刻まれている例もあります。このように、国東半島は”石造美術の宝庫“といわれるほど、石造美術の数と種類があります。

岩戸寺宝塔

照恩寺国東塔

豊の国千年ロマン観光圏　まちあるき情報

神代 姫島村 とっておきのひめしま村あるき

実施日 調整可（平日のみ）
最小人員 5名
出発 大帯八幡社南鳥居前（出発10時15分、到着11時15分）
所要 約1時間
費用 大人一人500円、小人一人300円
予約 必要
問合せ
姫島観光LLP「島の風」〔まるい商事〕（0978-87-3505）

コース 大帯八幡社→旧専売公社跡地→北浦蛭子様→姫島庄屋古庄家→旧郵便局→だるま橋→大帯八幡社

宇佐市 神仏習合の里散策

実施日 調整可
最小人員 3名
出発 宇佐市観光協会
所要 約2時間
費用 大人 650円（拝観料含む）
予約 必要
問合せ
宇佐市観光協会（0978-37-0202）

コース 宇佐神宮（弥勒寺跡）→大善寺→極楽寺→大楽寺

古代 国東市 開運ロードとみくじ

実施日 毎日（要予約）
出発 調整可
集合 マネーき猫公園（調整可）
所要 調整可
費用 団体1カ所辺り1,000円
問合せ 国東市役所商工観光課（0978-72-5168）

コース 富来港、富来神社、文殊仙寺等

中世 豊後高田市 千年の刻めぐり

実施日 毎日（要予約）
最小人員 5名
出発 調整可
集合 荘園ほたる（調整可）
所要 約1時間
費用 一人200円
問合せ 豊後高田市

コース 穴井戸観音→朝日観音→夕日観音（田染荘の眺望）

近世 中津市 城下町中津史跡めぐり

実施日 毎日（1週間前までに予約必要）
出発 調整可
集合 調整可
所要 約2時間（調整可）
費用 無料（ただし別途施設入館料が必要）
問合せ 中津耶馬溪観光案内所（0979-23-4511）

コース 中津駅→寺町→福澤旧居→中津城

杵築市 杵築城下町散策

実施日 毎日（要予約）
出発 調整可
所要 調整可
費用 無料（ただし別途施設入館料が必要）
問合せ 杵築市観光協会（0978-63-0100）

日出町 ひじ　ふれあいまち歩き

実施日 毎日（要予約）
出発 調整可
集合 二の丸館（調整可）
所要 約1～2時間（調整可）
費用 ガイド1名に付き1,000円
問合せ 日出町観光協会（0977-72-4255）

近代 別府市

竹瓦かいわい路地裏散歩

実施日① 毎週月・水・金・土・日曜日（お盆・年末年始除外あり/第2・4日曜日は除く）
出発・集合 午前10時/JR別府駅構内観光案内所前
問合せ 別府八湯語り部の会ボランティアガイド部会（0977-24-2828）

実施日② 毎月第2・4日曜日（お盆・年末年始除外あり）
出発・集合 午前9時半/北浜公園
午前10時/JR別府駅構内
問合せ 別府八湯竹瓦倶楽部（0977-22-1334）
所要 約2時間半
費用 大人700円/小学生350円（お茶+おやつ付）

竹瓦温泉ゆうぐれ散策

実施日 毎日（年末年始除外あり）
出発 午後4時
集合 花菱ホテル（北浜公園隣）
所要 約1時間　竹瓦温泉前解散（入浴希望者はタオル持参）
費用 大人500円/小学生以下無料（お茶+おやつ付）
問合せ 別府市旅館ホテル組合連合会（0977-22-0401）

竹瓦・夜の路地裏散歩

実施日 毎月第2・第4金曜日（お盆・年末年始除外あり）
出発 午後8時30分
集合 竹瓦温泉前
所要 約1時間30分（距離にして約1キロ）
費用 大人1000円（記念タオル付）
問合せ 平野資料館（0977-23-4748）

山の手レトロ散策

実施日 毎週日曜日
出発 午前10時
集合 第1日曜日/グローバルタワー下
その他の日曜日/JR別府駅構内観光協会案内所前
所要 約2時間30分（距離にして3キロ程度）
費用 ①第1日曜日:1人1,500円（昼食・記念写真・各施設への入場料込み）
②その他の日曜日:大人700円/小学生350円/幼児無料（お茶+おやつ付）
問合せ
①山の手倶楽部（0977-22-0401）
②別府八湯語り部の会ボランティアガイド部会（0977-24-2828）

鉄輪温泉散歩

湯けむり散歩
実施日① 毎月第3日曜日
出発・集合 午前10時/鉄輪温泉・大谷公園
所要 約2時間半
費用 大人700円/小学生350円（お茶・おやつ付）

ゆうぐれ散歩
実施日② 毎週土・日曜日（GW・年末年始除外あり）
出発・集合 午後4時/里の駅かんなわ「蒸 de 喜屋」
所要 約1時間
費用 大人500円/小学生250円（おやつ付）
問合せ 鉄輪湯けむり倶楽部（0977-66-4141 ホテル風月HAMMOND内）

豊後高田市

昭和の町散策

実施日 毎日（要予約）
最小人員 5名
出発 調整可
集合 昭和ロマン蔵
所要 約50分
費用団体バス1台2,000円、個人200円
問合せ 豊後高田市観光まちづくり㈱（0978-23-1860）

アクセス

航　空

東　京（羽田）— 大　分	1時間30分	1日11往復	JAL・ANA・ソラシドエア
大　阪（伊丹）— 大　分	1時間	1日　6往復	JAL・ANA・IBEX
名古屋（中部）— 大　分	1時間10分	1日　2往復	ANA
ソウル（仁川）— 大　分	1時間35分	夏季週2往復・冬季週3往復	KAL

JR

東　京—別　府	約6時間30分	博　多—別　府	約2時間
名古屋—別　府	約5時間	熊　本—別　府	約3時間
新大阪—別　府	約4時間	鹿児島中央—別　府	約4時間30分

大分空港接続交通機関

空港特急バス（エアライナー）

空　港 — 杵　築　16分　690円　　空　港 — 別　府　40分　1,450円
空　港 — 日　出　22分　1,050円　　空　港 — 大　分　60分　1,500円

湯布院高速リムジンバス

空　港 — 由布院　55分　1,500円

県南高速リムジンバス

空　港 — 臼　杵　81分　2,300円　　空　港 — 佐　伯　119分　2,800円

県北快速リムジンバス

空　港 — 中　津　90分　1,500円

■大分空港バス案内所 …… TEL.0978-67-1198

フェリー

スオーナダフェリー …… TEL.0978-84-0114
周南市（徳山港）— 国東市（竹田津港）　約2時間

フェリーさんふらわあ（神戸—大分航路予約センター） …… TEL.0120-56-3268
神　戸 — 大　分　約11時間20分

フェリーさんふらわあ（大阪電話予約センター） …… TEL.06-6572-5181
別　府 — 大　阪　約11時間50分
※松山へは別府発大阪行きのみ寄港（約13時間）

国道九四フェリー …… TEL.097-575-1020
三　崎 — 佐賀関　約1時間10分

宇和島運輸フェリー …… TEL.0977-21-2364
八幡浜 — 別　府　約2時間50分

姫島村営フェリー（姫島村役場船舶課） …… TEL.0978-87-2012
姫島村 — 国東市（伊美港）　約20分

インフォメーション

バス

大分交通 …… TEL.097-536-3655
大分バス …… TEL.097-532-7000
亀の井バス …… TEL.0977-25-3220

JR

JR中津駅 …… TEL.0979-22-5243
JR柳ヶ浦駅 …… TEL.0978-38-0149
JR宇佐駅 …… TEL.0978-37-0004
JR杵築駅 …… TEL.0978-62-2048
JR別府駅 …… TEL.0977-22-0585

フェリー

大分空港総合案内所 …… TEL.0978-67-1174
ANA国内線コールセンター …… TEL.0570-029-222
JAL国内線コールセンター …… TEL.0570-025-031

市町村名	問い合わせ先	電話番号	U R L
別府市	観光まちづくり課	0977-21-1111	http://www.city.beppu.oita.jp
中津市	観光課	0979-22-1111	http://www.city-nakatsu.jp
豊後高田市	商工観光課	0978-22-3100	http://www.city.bungotakada.oita.jp
杵築市	商工観光課	0978-62-3131	http://www.city.kitsuki.lg.jp
宇佐市	観光まちづくり課	0978-32-1111	http://www.city.usa.oita.jp
国東市	商工観光課	0978-72-5168	http://web.city.kunisaki.oita.jp
日出町	商工観光課	0977-73-3158	http://www.town.hiji.oita.jp
姫島村	水産・観光商工課	0978-87-2111	http://www.himeshima.jp

大分県文化遺産活用推進実行委員会
平成23年度 文化庁事業　文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業補助金
監修：別府大学

平成24年3月現在